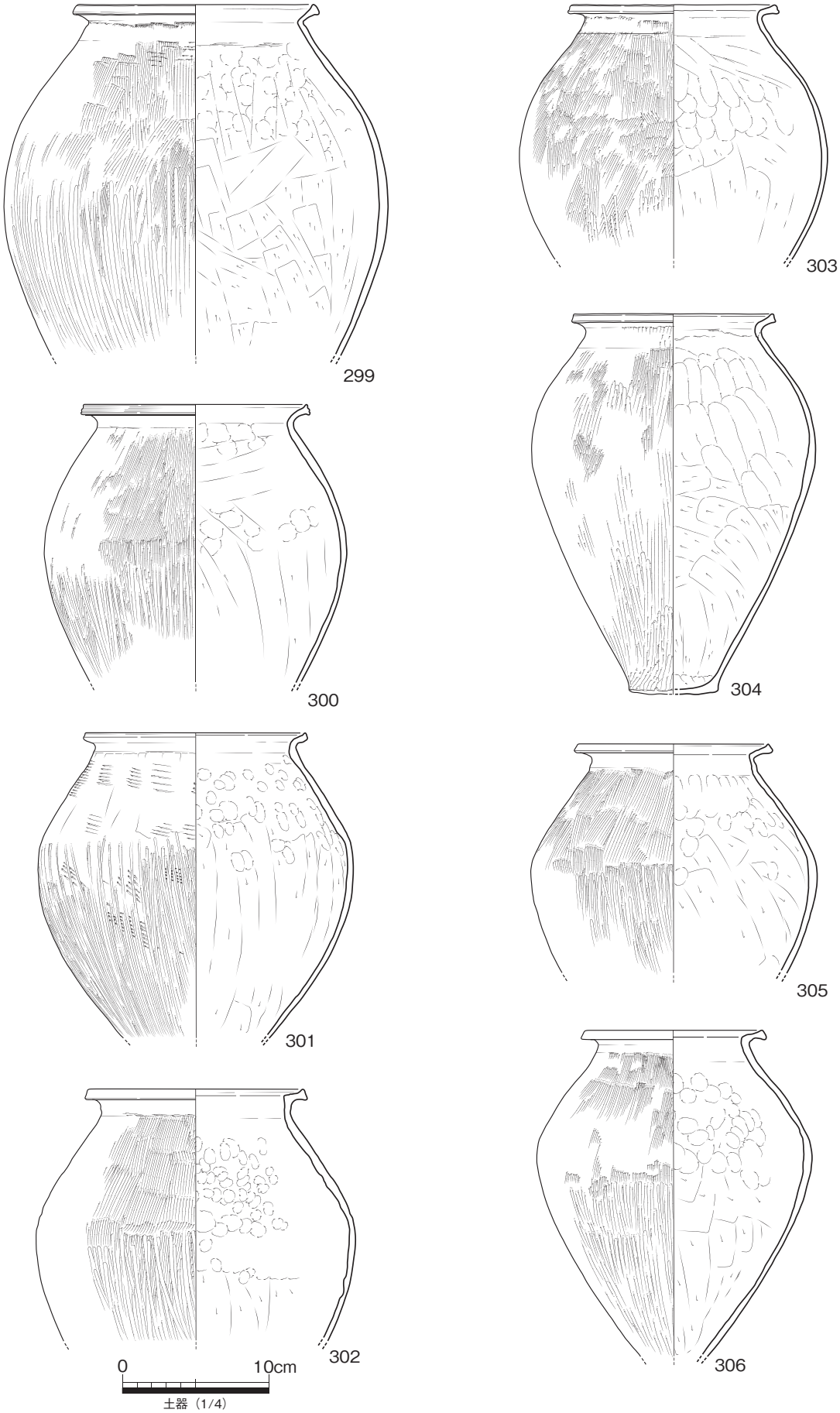
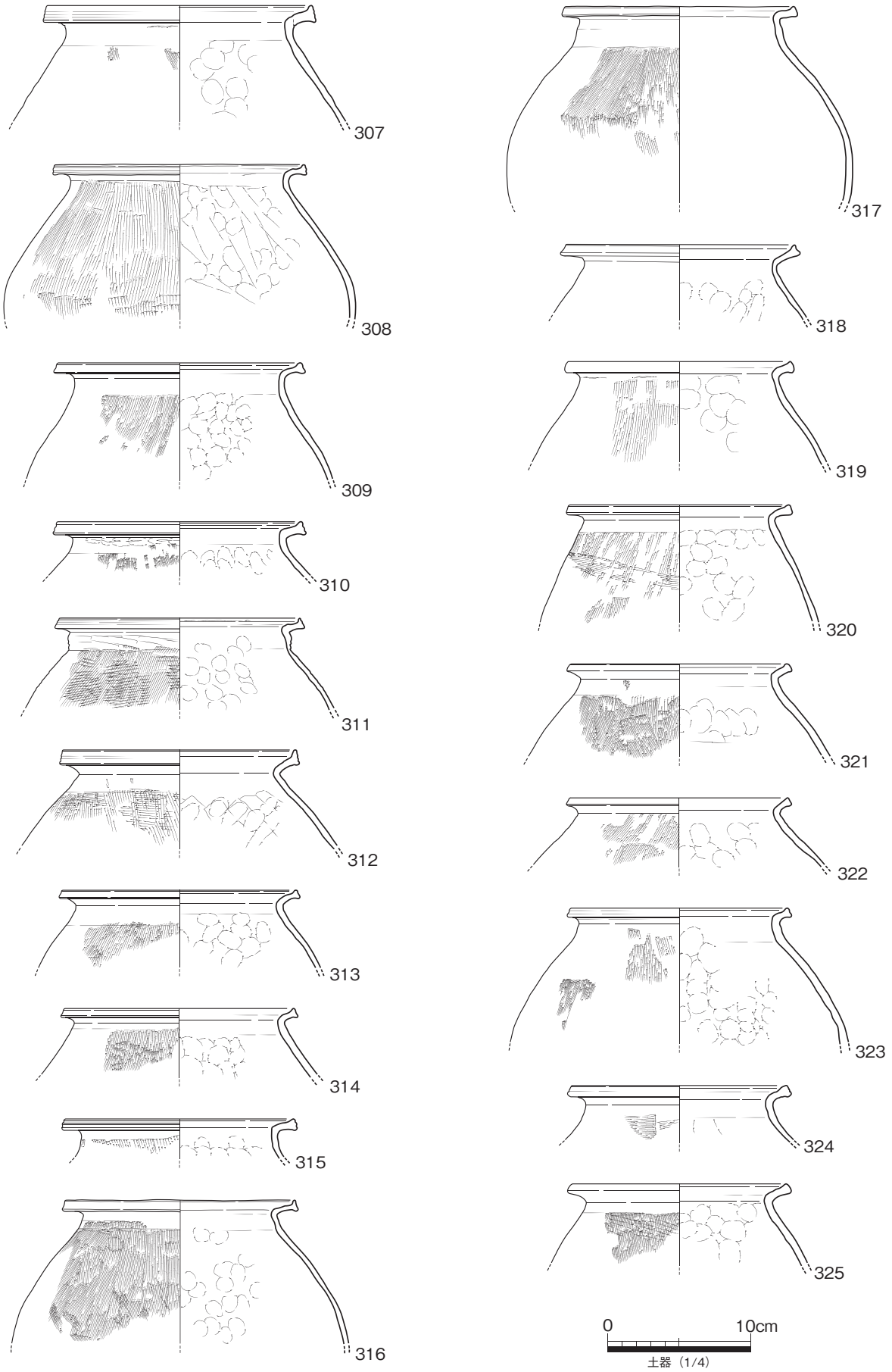
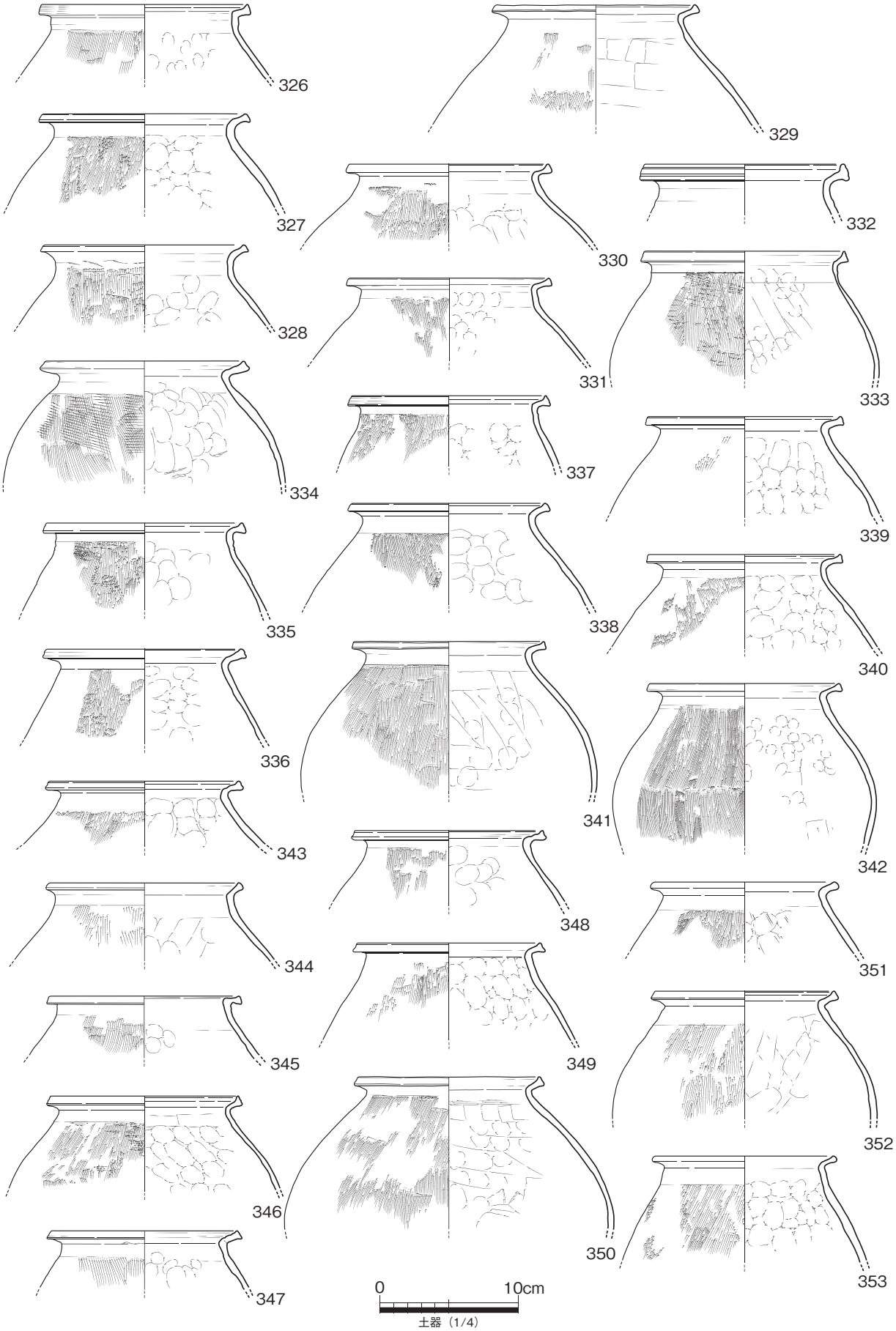


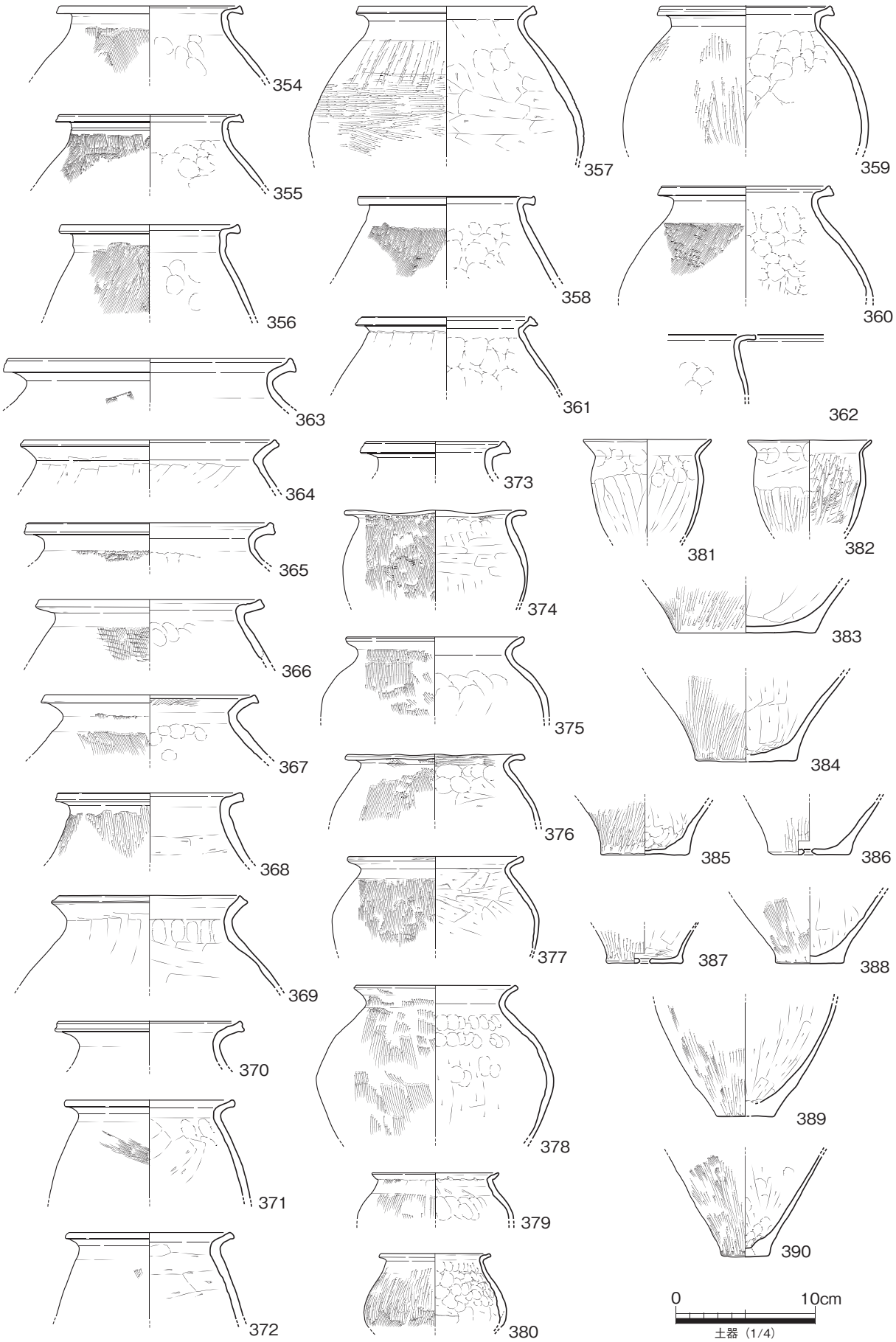

第 74 図　SD301　出土遺物 (3)



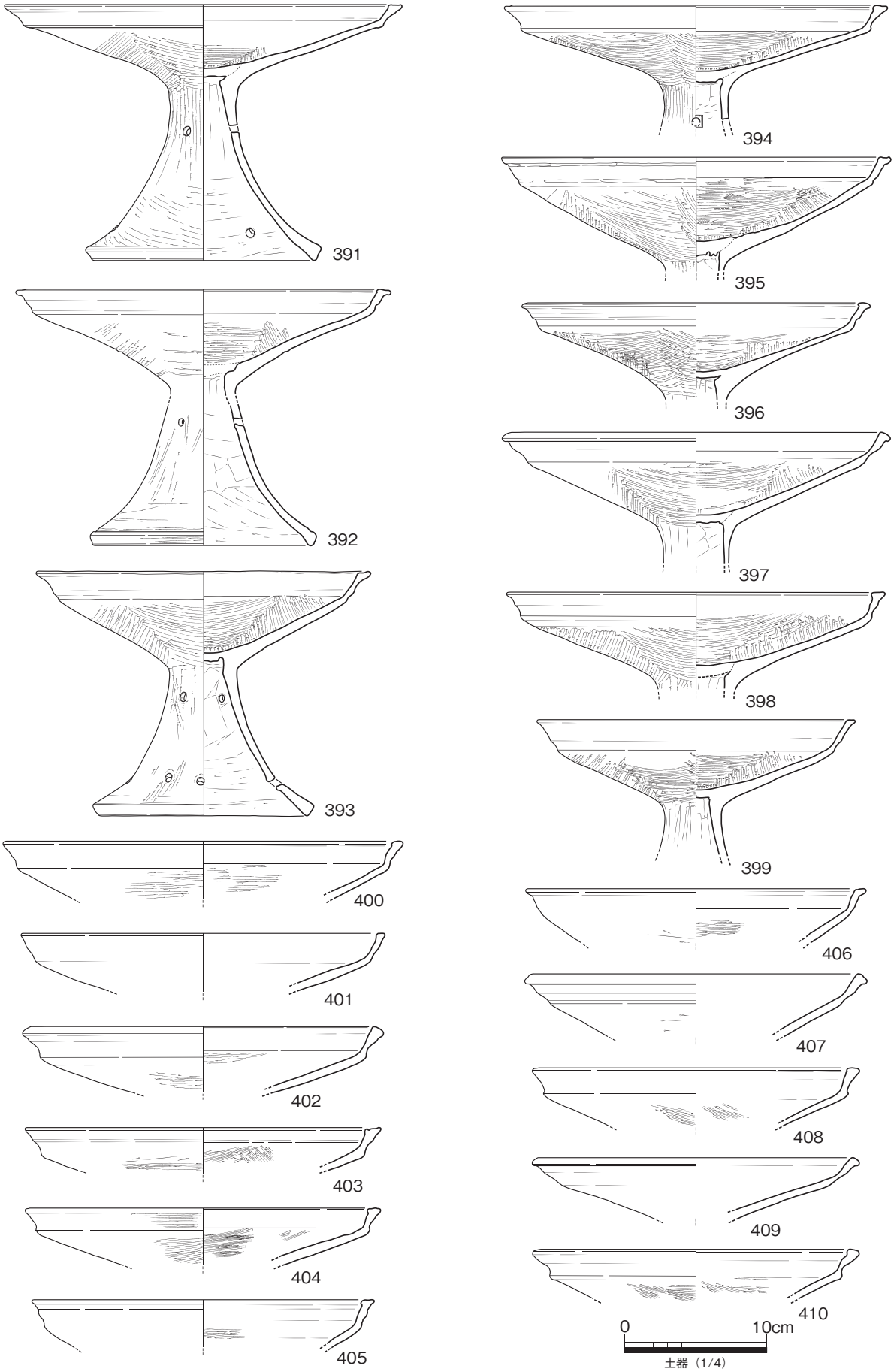

第 75 図　SD301　出土遺物 (4)



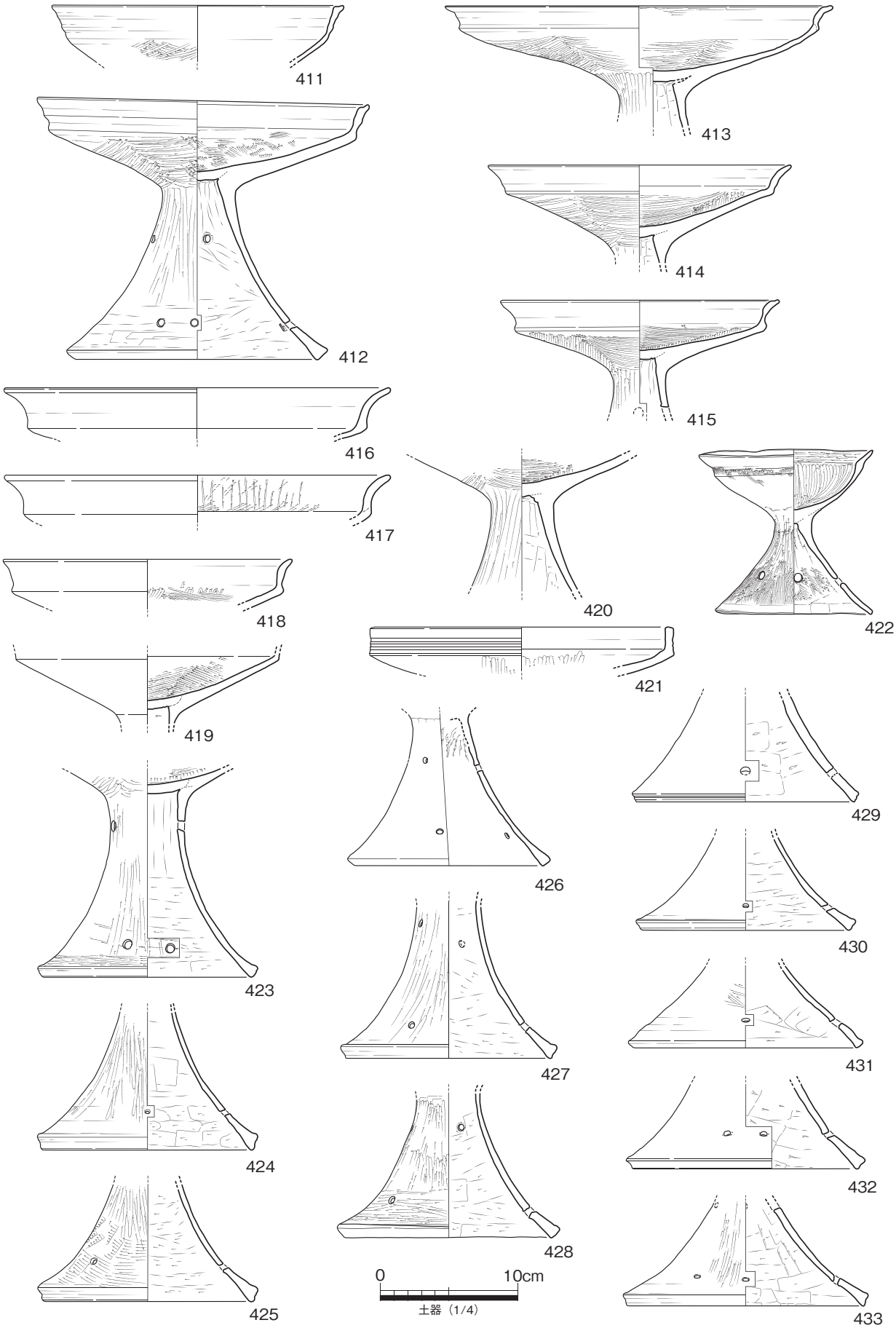

第 76 図　SD301　出土遺物 (5)



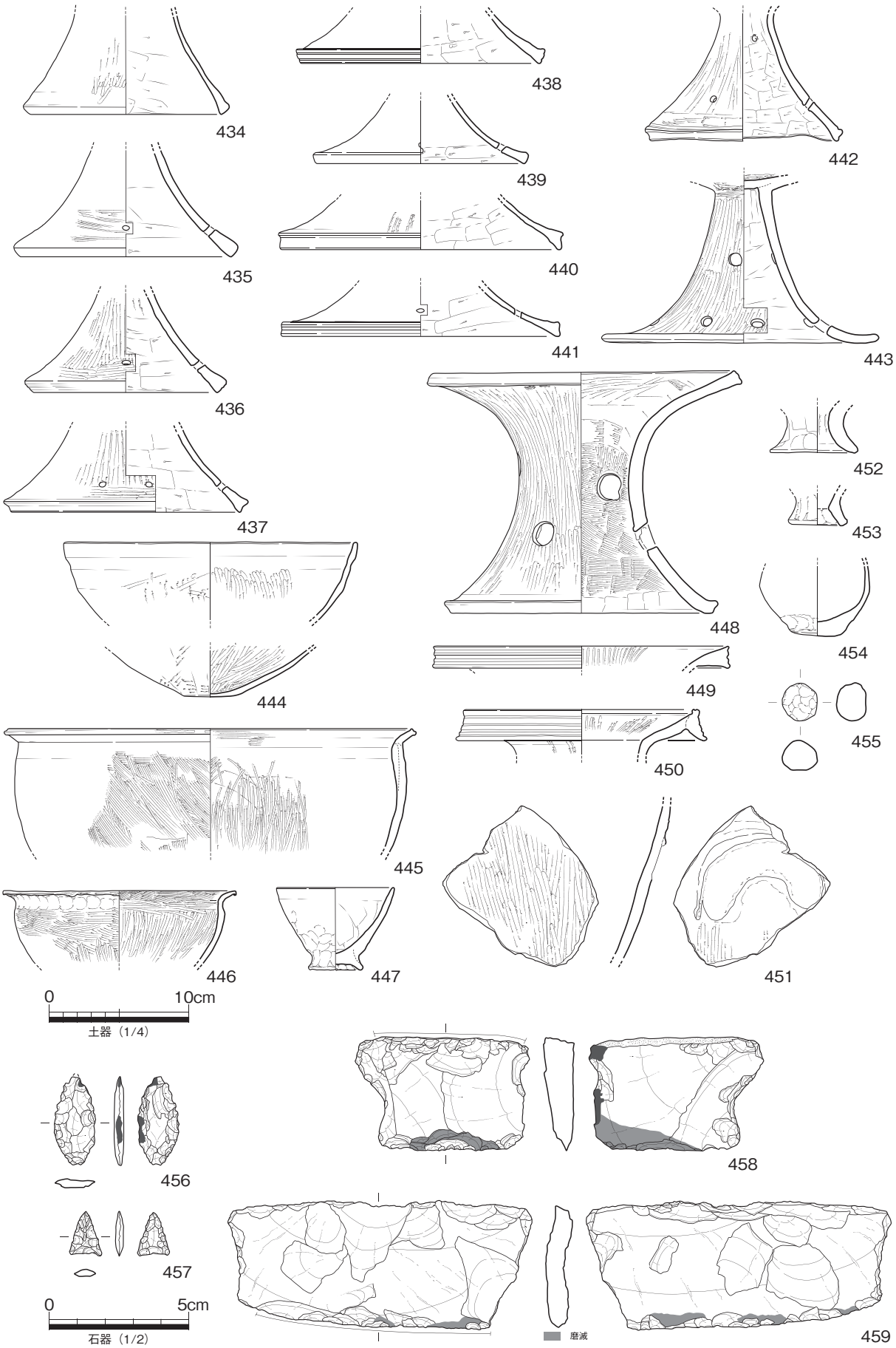

第 77 図　SD301　出土遺物 (6)



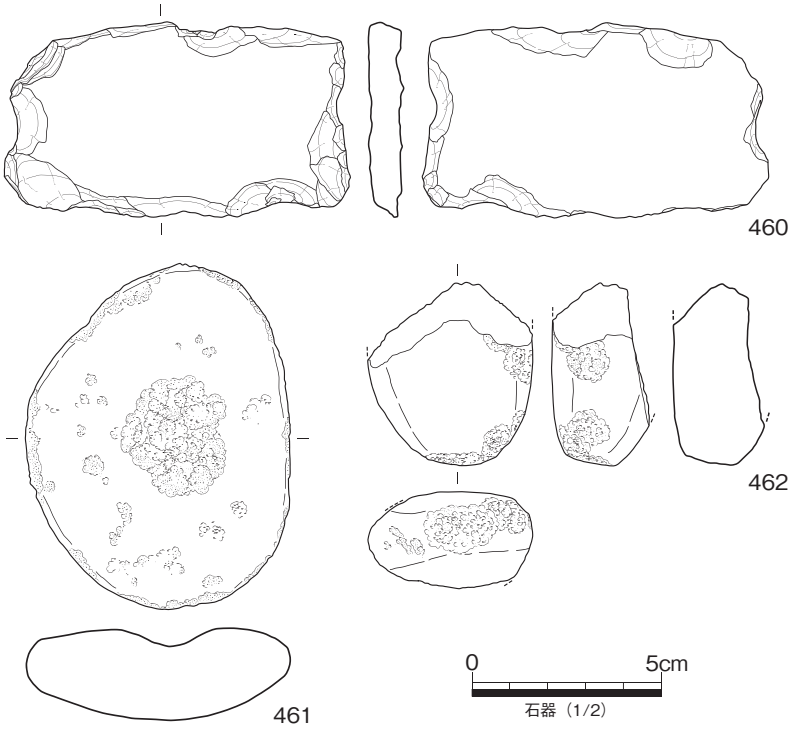

第 78 図　SD301　出土遺物 (7)




第 79 図　SD301　出土遺物 (8)




第 80 図　SD301　出土遺物 (9)




第 81 図 SD301　出土遺物 (10)

本地域における器台の最終形態である。448 は、完形に復元された資料で、口縁端部は小さく上下に拡張して、内傾する端面に２条の浅い凹線を施す。胴部には、上下に３方向の円形透孔を穿つ。449・450 は口縁部の小片だが、端部は肥厚ないし上下に大きく拡張し、端面にそれぞれ多条の凹線を施す。450 は、吉備系の器台である。

456・457 はサヌカイト製の打製石鏃である。458 はサヌカイト製の小型の打製石庖丁で、背部に自然面を残す。両側には叩打による抉りを施し、表裏面にマメツ痕を認める。459・460 は安山岩製の打製石庖丁である。厚さ７～８㎜程度の板状の素材を利用し、周囲を荒く打ち欠いて成形する。459 の刃部は使用により強くマメツする。461 は粗粒砂岩製の敲き石で、長径約９㎝、厚さ約２㎝の円礫を使用し、敲打により中央部が強く窪む。462 は、細粒砂岩製の敲き石の小片で、図下端部を中心に顕著な敲打痕を認める。

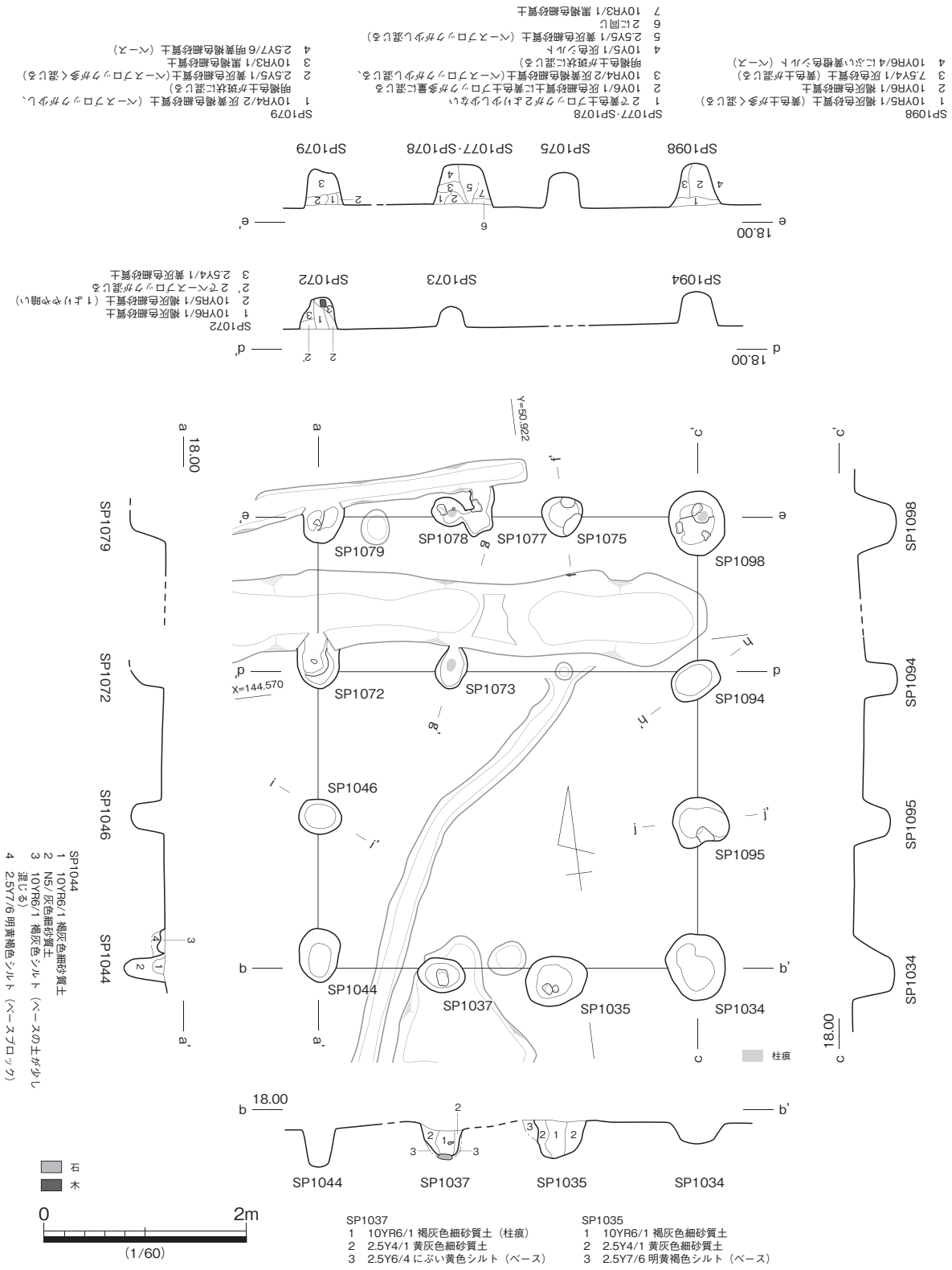
３．平安時代の遺構

①掘立柱建物

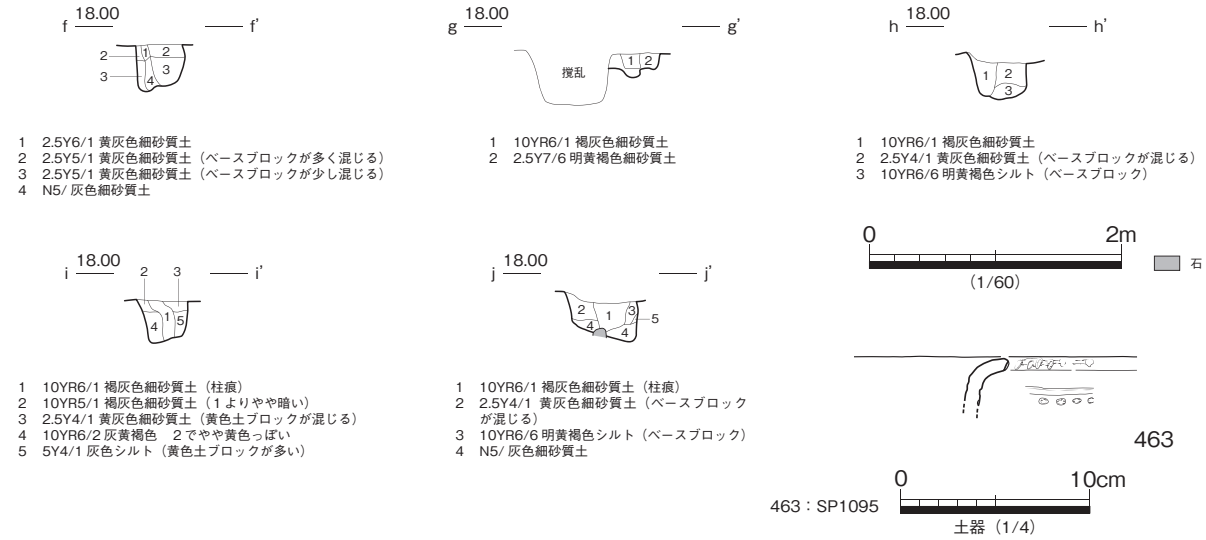
**SB101( 第 82 図・第 83 図 )**

Ⅰ区中央東寄り付近で検出した掘立柱建物である。3 間（3.75m）× 3 間（4.55m）の南北棟で、建物方位は N7.2° E、面積は 17.1㎡である。北側 2 穴目に間仕切りを持つ。柱間は桁方向が 1.4m～ 1.6m、梁間方向が 1.1m～ 1.4mである。柱穴は不整円形または楕円形で長軸 16.1 ～ 32.8㎝、短軸 13.7 ～ 28.6㎝、深さ 20 ～ 44㎝程度、直径 10 ～ 15㎝程度の柱穴痕が残る。概ね柱痕部分は褐灰色細砂質土、掘方部分は黄灰色細砂質土で、柱穴の底に根石を据えるものもある。埋土中からは弥生土器小片が出土したが、柱穴の規模や掘立柱建物の状況から、10 世紀代の建物と考える。

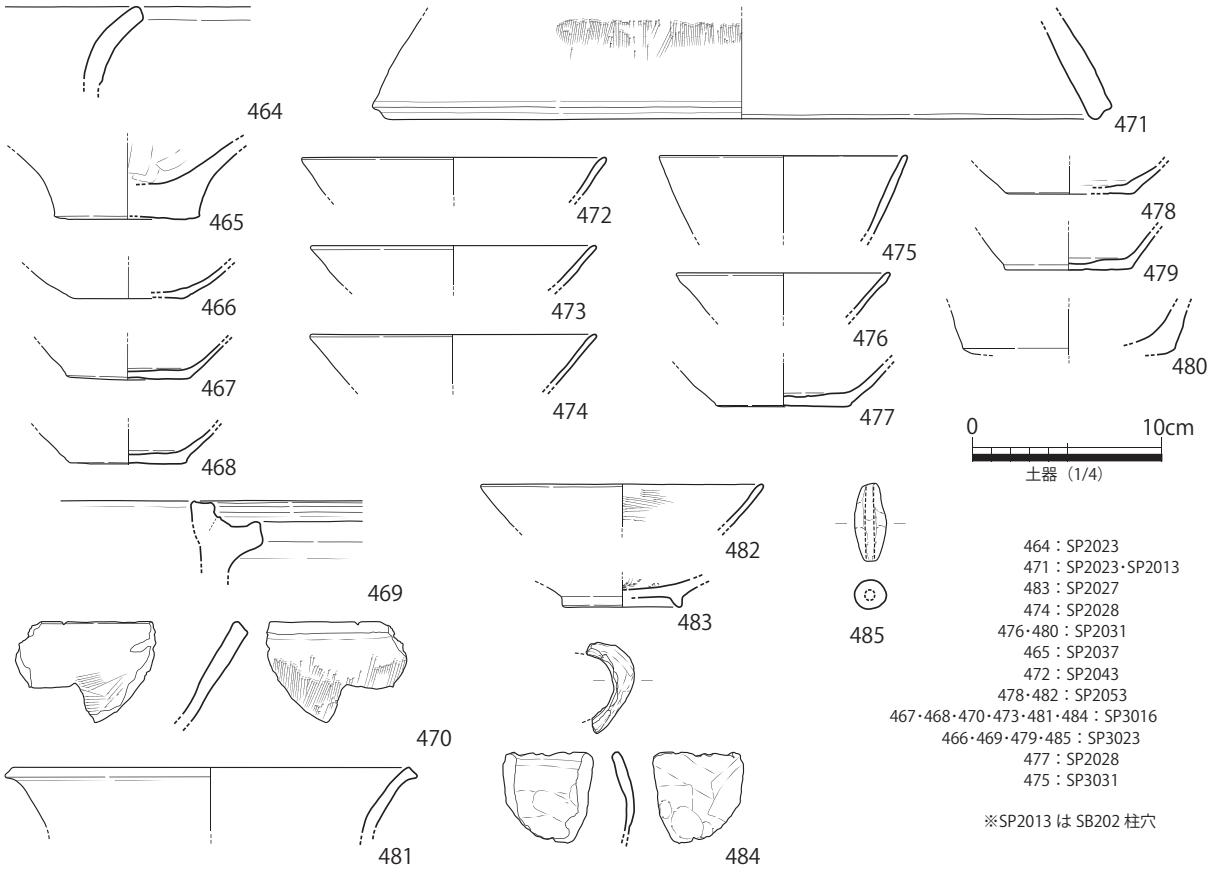
463 は弥生土器甕小片。口縁端部に刻み目を施し、体部にはヘラ描き沈線とその下部に円形の刺突文



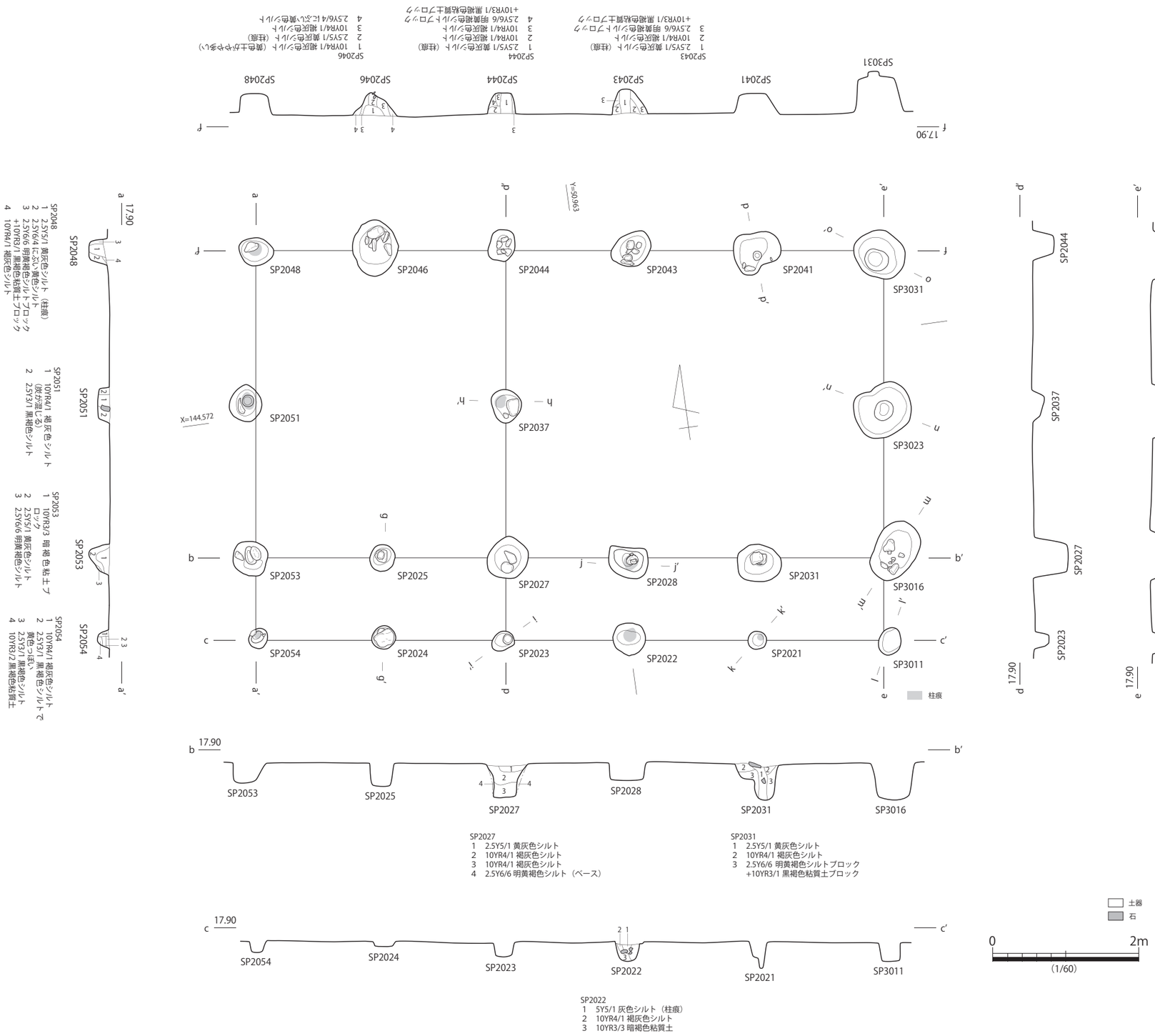

第 82 図　SB101　平・断面図 (1)



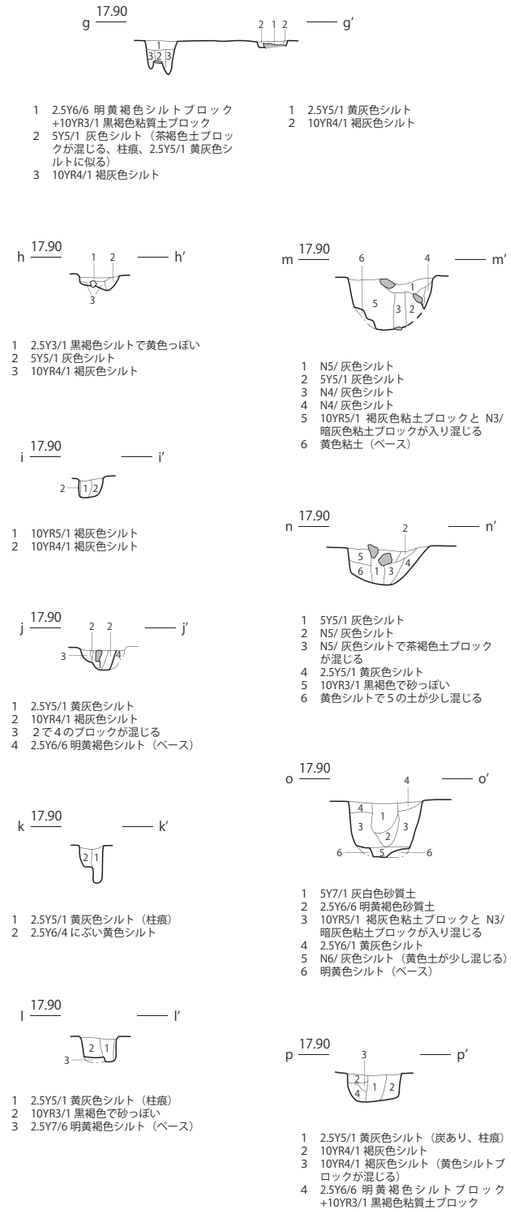

第 83 図 SB101 断面図 (2)・出土遺物 (1)

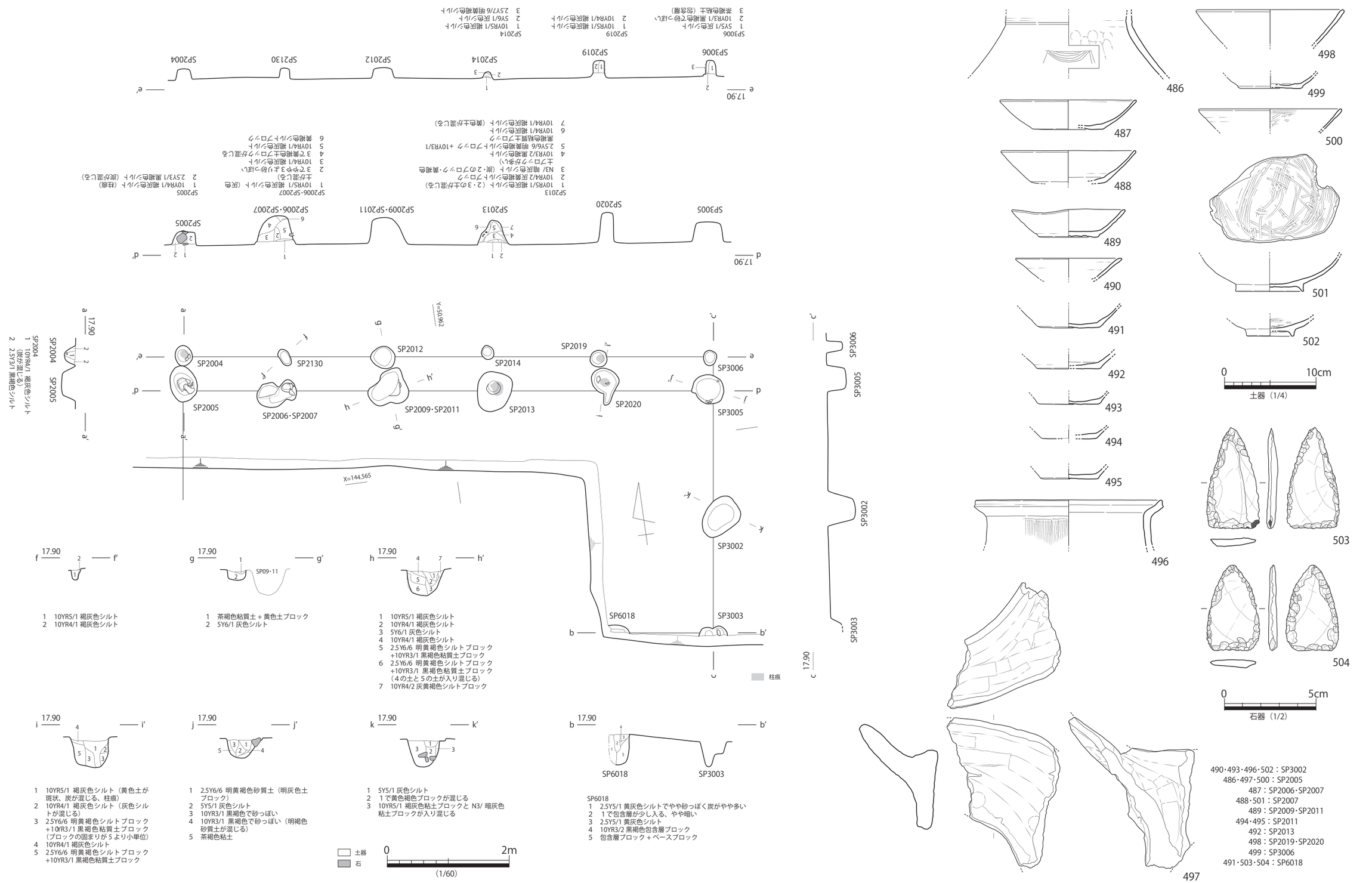



第 84 図 SB201 出土遺物

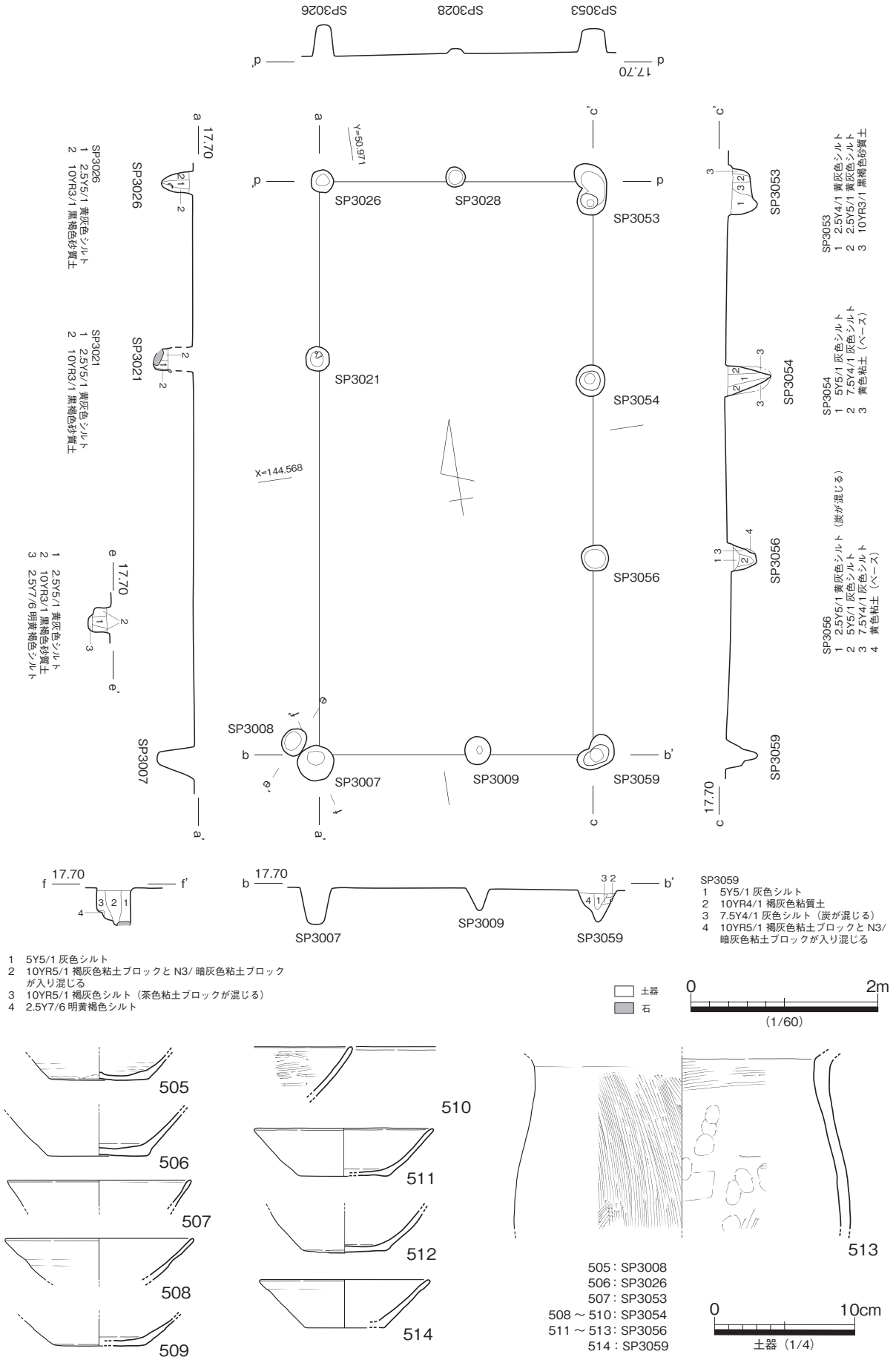



第 85 図　SB201　平・断面図






第 86 図　SB202　平・断面図、出土遺物




第 87 図　SB203　平・断面図、出土遺物

を施す。弥生時代前期Ⅱａ期。周辺からの混入と考える。

**SB201( 第 84 図・第 85 図 )**

Ⅱ区東端付近で検出した掘立柱建物である。桁行 5 間（8.7m）×梁間 2 間（4.25m）の東西棟で、西側 3 穴目に間仕切りを持つ。南側柱列より 1.5mの位置で庇が付く。建物方位はN 97.9° E、面積は庇部分を含めれば 46.5㎡、身舎部分が 37.0㎡である。SB202 と柱筋を揃える。柱間は桁方向が 1.6 ～ 1.8m、梁方向が 2.1 ～ 2.15m、柱穴はおおむね円形で、身舎部分が直径 50 ～ 70㎝程度、深さ 30 ～ 90㎝程度、庇部分が 25 ～ 42㎝程度、深さ 13 ～ 46㎝程度、柱痕跡は直径 25㎝程度、埋土は柱痕部分で黄灰色シルト、掘方部分は褐灰色シルトなどである。

464 ～ 485 は SB201 柱穴から出土した遺物である。464･465 は弥生土器。464 は壺、465 は壺底部でともに小片である。弥生時代前期の遺物で、周辺遺構からの混入と考えられる。466 ～ 471 は土師質土器。466 ～ 468 は杯。須恵器杯と共通する器形を持つ。469 は羽釜口縁部。470・471 は器種不明。472 ～ 481 は須恵器。472 ～ 479 は杯。小片で口径の復元に難があるものもある。474 は口縁端部内外面に重ね焼き痕跡がある。474・477 は焼成不良である。480 は壺底部。焼成不良である。481 は甕口縁部。口縁端部を外側へ拡張させる。482･483 は黒色土器 A 類椀。484 は製塩土器小片。歪みが著しい。485 は管状土錘。

出土遺物は概ね佐藤編年Ⅳ期新相と考えられ、遺構の時期は 10 世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

**SB202( 第 86 図 )**

Ⅱ区東南端、SB201 の南側に接して検出した。桁行 5 間（8.7m）×梁間 2 間（3.9m）の東西棟で、北側柱列より 0.55mの位置に庇が付く。建物方位はN 98.1° E、庇部分を含めた面積は 38.7㎡、身舎部分の面積は約 33.9㎡である。SB201 と柱筋を揃えており、同時併存したものと考えられる。柱間は桁方向が 1.6 ～ 1.9m、梁方向が 1.6 ～ 2.1m、柱穴は概ね円形で身舎部分が直径 43 ～ 70㎝程度、深さ 21 ～ 42㎝程度、庇部分が直径 24 ～ 37㎝程度、深さ 11 ～ 22㎝程度、埋土は柱痕部分で褐灰色シルト、掘方部分は黒褐色シルトなどである。

486 は弥生土器壺。体部に連弧文を描く。弥生時代前期Ⅰｃ期。周辺遺構からの混入と考えられる。487 ～ 497 は土師質土器。487 ～ 495 は杯。須恵器杯と共通する器形を持つ。496 は長胴甕。口縁端部は上部へ拡張する。497 は竈。上部の一部で、受け口、火窓、鍔の一部が残る。498･499 は須恵器杯。499 は焼成不良である。500 ～ 502 は黒色土器 A 類椀。内面にヘラ磨きを施す。503･504 はサヌカイト製打製石鏃。共に平基式で、周縁部のみ加工する。周辺遺構からの混入と考えられるが、周囲の遺構から多く出土している石鏃に比べ大きいものである。

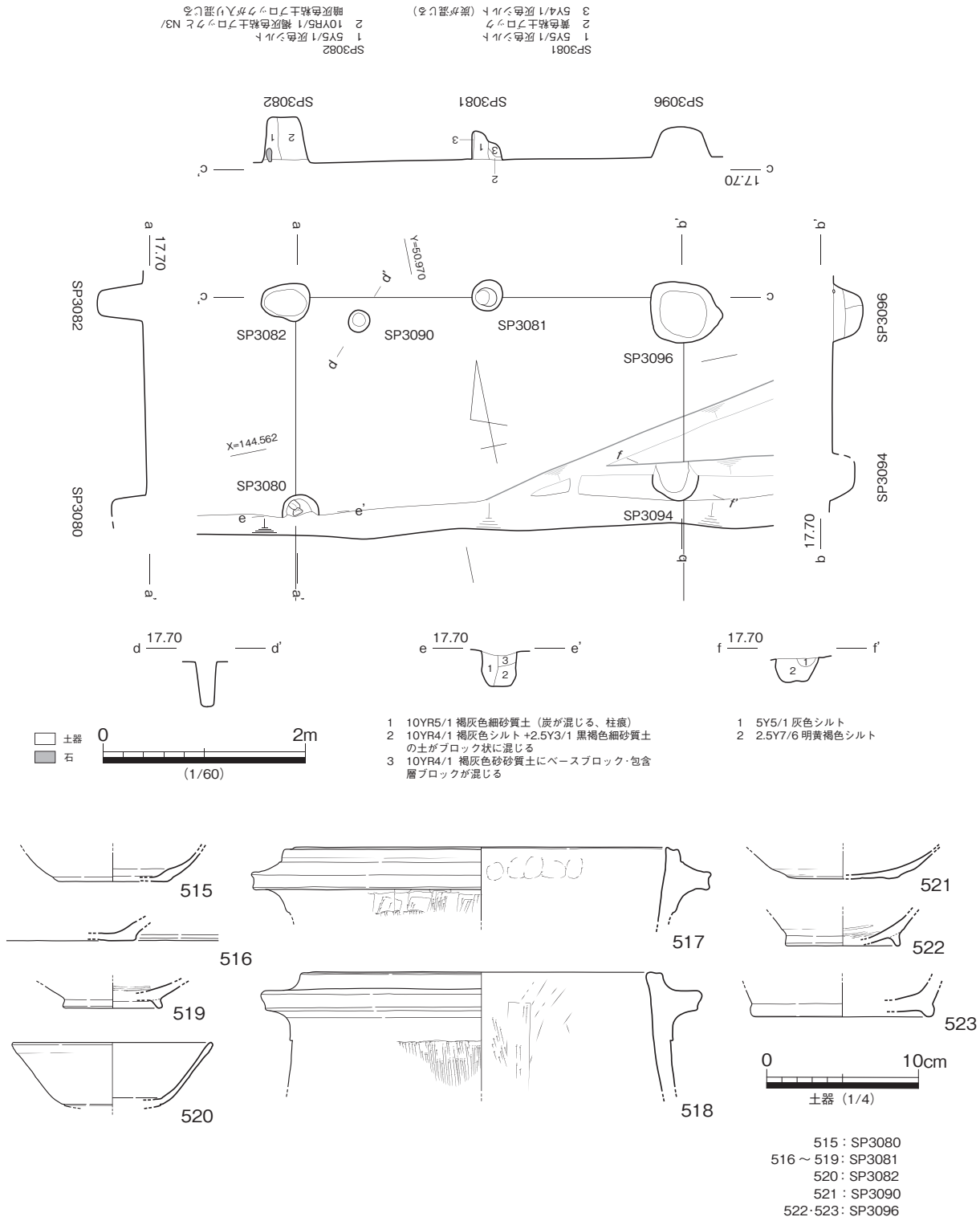
出土遺物は概ね佐藤編年Ⅳ期新相と考えられ、遺構の時期は 10 世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

**SB203( 第 87 図 )**

Ⅲ区西部、SB201 の 2.7m東側、SA202 の 0.9m東側で検出した。桁行 3 間（6.15m）×梁間 2 間（2.9m）で、西側柱列の南から 2 穴目は検出できなかった。建物の主軸方位はN 8.5E で、面積は 17.8㎡である。南側の柱筋は SB202 北側身舎柱筋に概ね揃う。柱間は桁方向が 1.9 ～ 2.2m、梁方向は 1.15 ～ 1.75mでややばらつきが認められる。柱穴は円形で、直径 26 ～ 34㎝、深さは 31 ～ 42㎝である。建物の北東・北西角は 2 穴が連結する形状で、南西隅についても 2 穴接して検出している。埋土は概ね柱

痕跡が黄灰色シルト、灰色シルト、掘方が黒褐色砂質土などである。

505 は SB203 南西隅柱穴に接して検出したピットから出土した遺物である。両者は近接するが、重複はなく前後関係は不明であるが、出土遺物からは両者に時期差は認められない。505 ～ 507･514 は須恵器杯。506・507 は焼成不良である。508･509･511･512 は土師器質土器杯。須恵器の杯と共通する器形である。513 は土師質土器長胴甕。口縁端部が上方へ拡張する器形と考えられる。510 は黒色土器 A 類椀。小片。




第 88 図　SB204　平・断面図、出土遺物

出土遺物は概ね佐藤編年Ⅳ期新相と考えられ、遺構の時期は10世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

**SB204(第88図)**

SB203の南側1.85m、SB202の東側2.5mの位置で検出した。北側の梁間はSB202の梁間中央の柱筋とほぼ揃い、SB202の桁方向の柱間とSB203の梁方向の柱間はほぼ同じである。桁行1間（2.1m）以上、梁間2間（3.95m）、主軸方位はN 11.4° E、面積は8.3㎡以上である。柱間は桁方向が1.75～2.1m、梁方向が1.7～2.05mでややばらつきがある。柱穴はほぼ円形で、直径32～45㎝で北東隅の柱穴のみ隅丸方形で1辺60㎝程度を測る。深さ26～46㎝程度である。

515～518･521は土師質土器。515･516･521は杯。須恵器と共通する器形である。517･518は羽釜。520は須恵器杯。519･522･523は黒色土器A類椀。

出土遺物は概ね佐藤編年Ⅳ期新相と考えられ、遺構の時期は10世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

**SB301(第89図)**

Ⅲ区東端で検出した掘立柱建物である。平成9年度に高松市教育委員会文化振興課（当時）が、今回の調査区から約3m東側で道路側溝工事に伴う立会調査を行ったが、その際にSB301に関連すると考えられる柱穴を確認している。（高松市教育委員会　2000.3　太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三冊『上西原遺跡　附汲仏遺跡』　ただし、両者の位置関係については、双方の記録類を検討の上変更している。記録類の検討に当たっては高松市創造都市推進局文化財課の協力を得た。）

南側・西側の柱穴の規模が小さいこと、高松市教育委員会の調査部分について、梁方向の北から2穴目の柱穴を検出しておらず3穴目の柱穴を検出していることから、SB301は西と南に庇を持つ桁行2間（5.48m）以上、梁間2間（5.03m）の掘立柱建物と考えられる。主軸方位はN84.7° Eである。桁方向の柱間は約2m、梁方向の2.55～2.75m、柱穴は概ね円形～隅丸方形で身舎部分の柱穴は直径70～80㎝、深さ61.7～69.4㎝程度で、庇部分の柱穴の直径40～55㎝、深さ36.7～56.6㎝程度である。

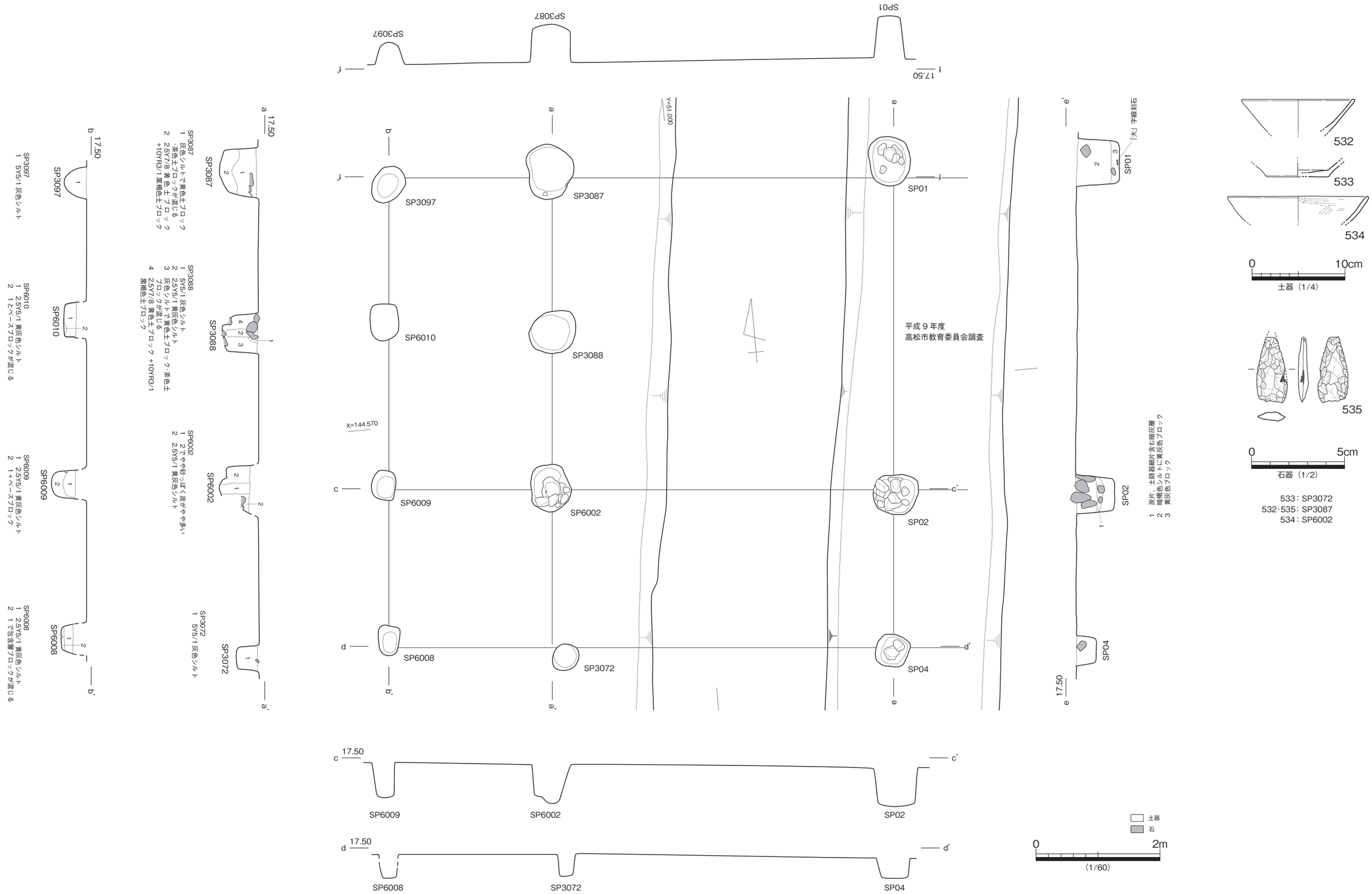
SB302とは若干主軸方位が異なるが、SB301の身舎部分の西側柱列とSB302の西側柱列がほぼ揃い、桁方向の柱間もほぼ同じであることから、両者は同時併存であったと考えられる。

532･533は須恵器杯。ともに焼成不良である。534は黒色土器A類椀。535はサヌカイト製打製石鏃。

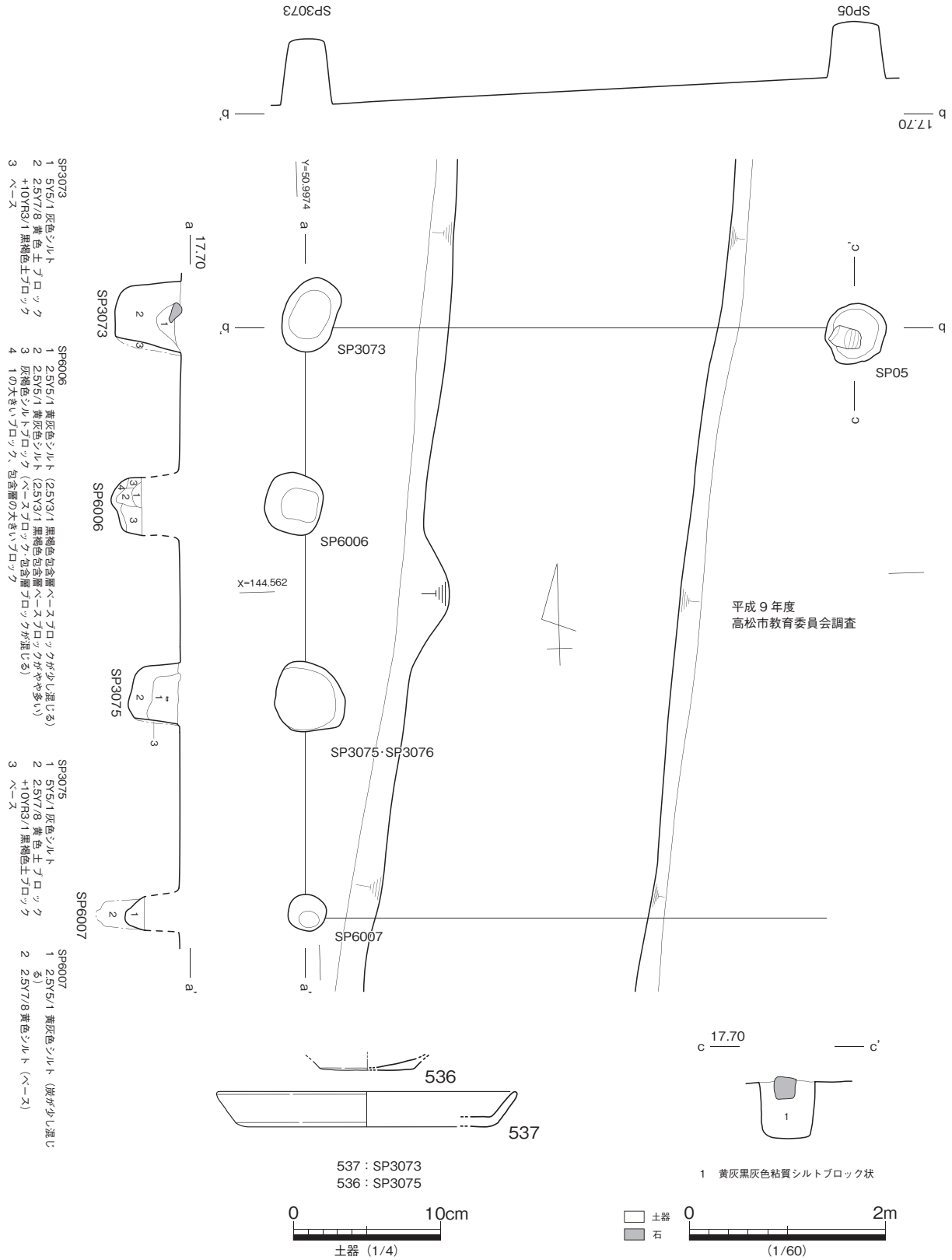
遺構の時期は出土遺物により佐藤編年Ⅳ期新相、10世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

**SB302(第90図)**

SB301の南側約1.5mの位置で、SB301西側柱列と柱筋を揃えて検出した。桁行3間分を検出した。最も南側の柱穴はやや規模が小さい。主軸方位はN91.7° Eである。SB301同様、平成9年度に高松市教育委員会文化振興課（当時）が本調査区から約3m東側で実施した道路側溝工事に伴う立会調査では、北側柱列の一部と考えられる柱1穴を検出した。南側の柱列に対応する位置では柱穴を検出できていないが東へ延びて掘立柱建物になる可能性が考えられる。梁方向の柱間は、北から2間は1.95m、南側1間分は2.25m、柱穴は最も南側1穴は円形で直径39㎝、深さ55㎝、その他は円形～隅丸方形で、直径60～70㎝、深さ50～65㎝程度を測る。最も南側の1穴は他に比べ規模が小さいことから、庇となる可能性もあろう。




第 89 図　SB301　平・断面図、出土遺物




第 90 図　SB302　平・断面図、出土遺物

536 は土師質土器杯。537 は須恵器皿。外面に火だすきがかかる。

出土遺物と SB301 との位置関係から、SB301 と同じ 10 世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

②柵列

**SA201( 第 91 図 )**

Ⅱ区東南部、SB201、SB202 の西側柱筋の西約 3m の位置で、これと平行して検出した。南北方向は 4 間分 (7.35m ) 検出し、最北部で東へ 1 間分（1.5m）折れる。主軸方位はＮ 8.4° Ｅである。南北方向の柱列の柱間は北側 3 間は 2.0 ～ 2.15 m、南側 1 間のみ 1.15m である。北側 3 穴までは SB201 の西側柱列と柱筋が揃い、北側の柱列は SB201 北側柱列とライン、柱間間隔が揃う。柱穴は円形で直径 24 ～ 37㎝、深さ 14 ～ 22㎝である。SP2068 から黒色土器 A 類椀小片が出土した。

SA201 は SB201･SB202 の西側を画する柵列となる遺構と考えられる。

SB201･202 との位置関係からいずれも同時期と考えられ、遺構の時期もこれらと同じ 10 世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

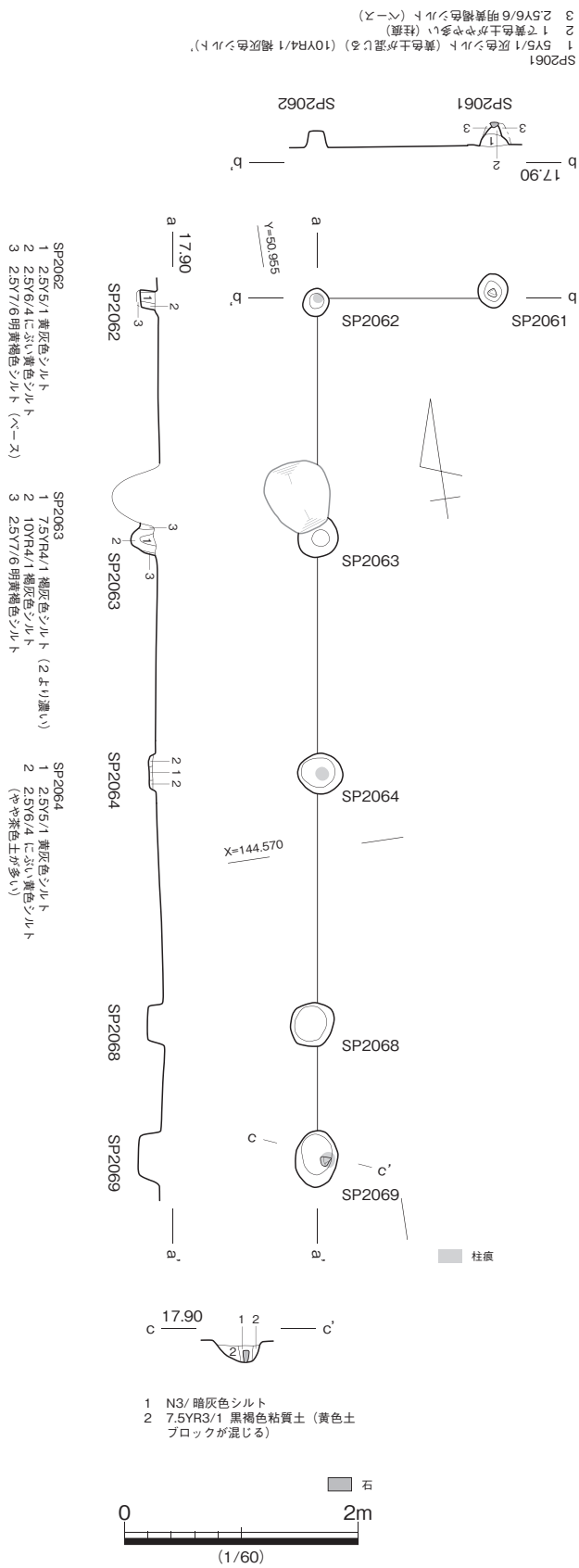
**SA202( 第 92 図 )**

Ⅲ区西部、SB201 の 2.7m 東側、SB203 の 0.9m 西側で検出した。3 間（4.95m）で、主軸方位は N8.1° E である。柱間は北から 2 間分が 1.85 ～ 2.1 m、南は 1.0m で、柱筋は SB201 の東側柱列とほぼ揃う。柱穴は円形で直径 20 ～ 28㎝、深さ 18 ～ 30㎝である。SB201 東側柱列との距離がややあるので柵列とし、SB201 と SB203 を区切る遮蔽施設と考えたが、SB201 の庇となる可能性もある。

524･527 は土師質土器杯。525 は黒色土器 A 類椀。小片。526 は弥生土器甕小片。2 条のヘラ描き沈線が残る。弥生時代前期Ⅰｃ期のもので、周辺からの混入と考えられる。

出土遺物は概ね佐藤編年Ⅳ期新相と考えられ、遺構の時期は 10 世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

**SA301( 第 93 図 )**

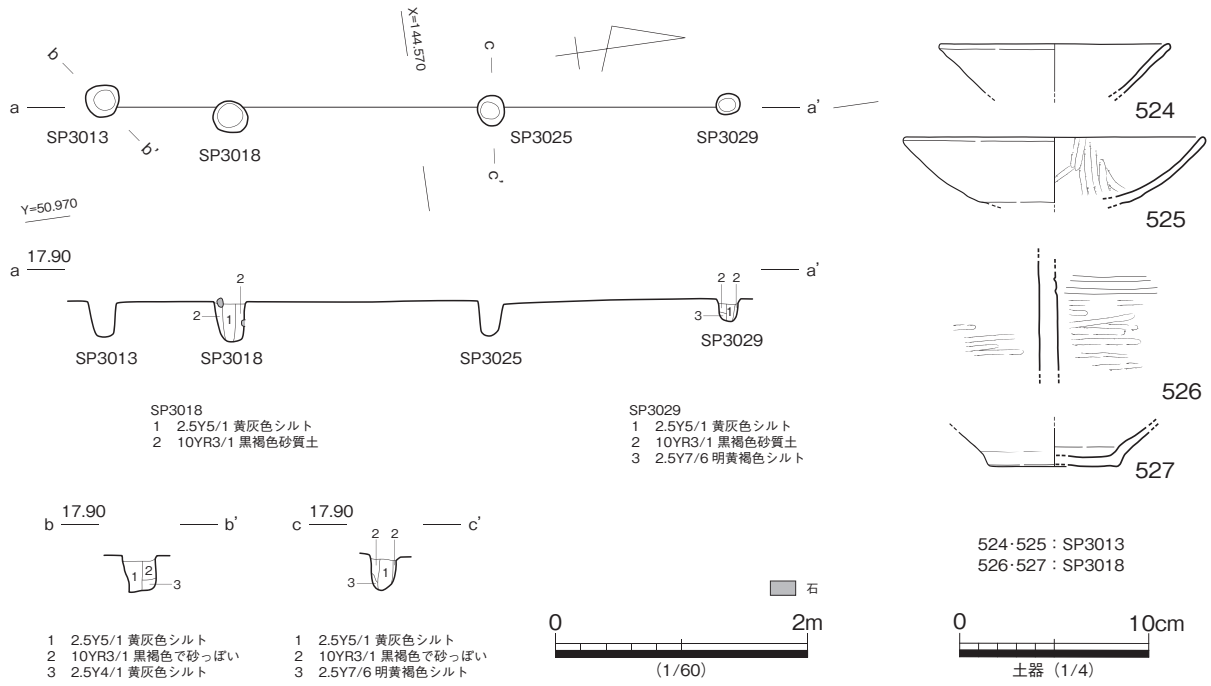



第 91 図 SA201　平・断面図

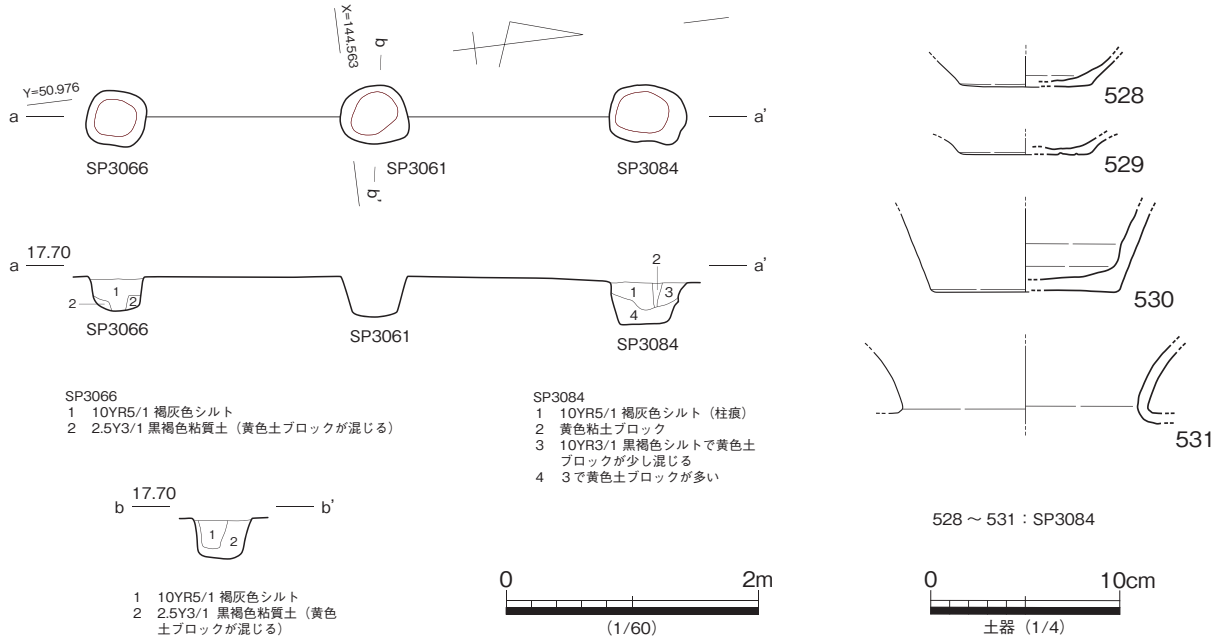
Ⅲ区中央南寄り、SB204 の東側 3.5m、SA404 の西側 3.15m で、2 間分（4.15m）を検出した。南へ続く可能性もある。柱間は 2.05 ～ 2.1m、主軸方位は N7.1° E である。柱穴は円形または隅丸方形で直径または 1 辺 43 ～ 61㎝、深さ 27 ～ 32㎝である。

528 は土師質土器杯。須恵器と共通する器形である。529 ～ 531 は須恵器。529 は杯。530 は壺底部。531 は甕頸部。口縁端部を外側へ拡張する器形である。

出土遺物は概ね佐藤編年Ⅳ期新相と考えられ、遺構の時期は 10 世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。




第 92 図　SA202　平・断面図、出土遺物




第 93 図　SA301　平・断面図、出土遺物

**SA404( 第 94 図 )**

Ⅲ区南部からⅣ区西部にかけて、SA301 の東側 3.15m で検出した。柱間の距離からⅢ区とⅣ区の間の未調査部分に 1 穴あると考えられる。3 間分（5.75m）を検出したが、南側へ延びる可能性もある。柱間は 3.8m 程度と考えられ、主軸方位は N5.0° E である。柱穴は円形または隅丸方形で、直径 35 ～ 58cm、深さ 32 ～ 38cm である。SP4017 の底には根石が据えられていた。

柱穴からの出土遺物はなかったが、柵列の方向や規模、柱穴の規模・形状や SA301 と同じ時期と考えられる。

③ピット

**SP1011( 第 95 図 )**

Ⅰ区東南隅近くで検出したピットである。円形で直径 25cm、深さ 25cm で、埋土は褐灰色砂質土である。

538 は黒色土器 A 類椀。

遺構の時期は、出土遺物により 9 世紀後半～ 10 世紀中葉と考えられる。

**SP1039( 第 95 図 )**

Ⅰ区中央部付近で検出したピットである。ほぼ円形で直径 35cm、深さ 11cm で、埋土は茶褐色シルト質土である。

539･540 は土師質土器杯。いずれも須恵器と共通する器形である。

遺構の時期は、出土遺物により佐藤編年Ⅳ期新相、10 世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

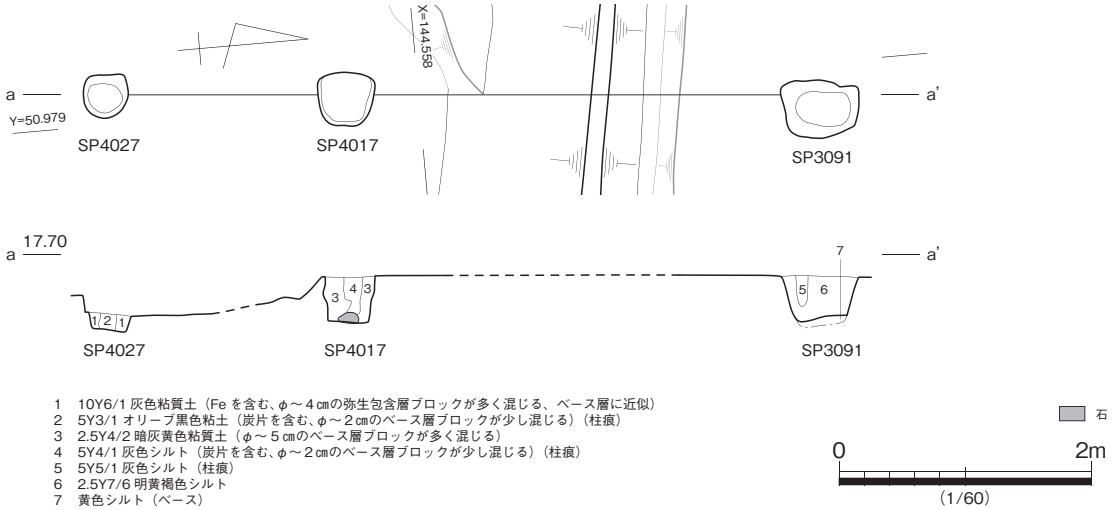
**SP2032( 第 95 図 )**

Ⅱ区東端部で検出したピットである。SB201 の内部に当たる位置で検出した。隅丸方形で、長軸 98 cm、短軸 81cm、深さ 22cm である。

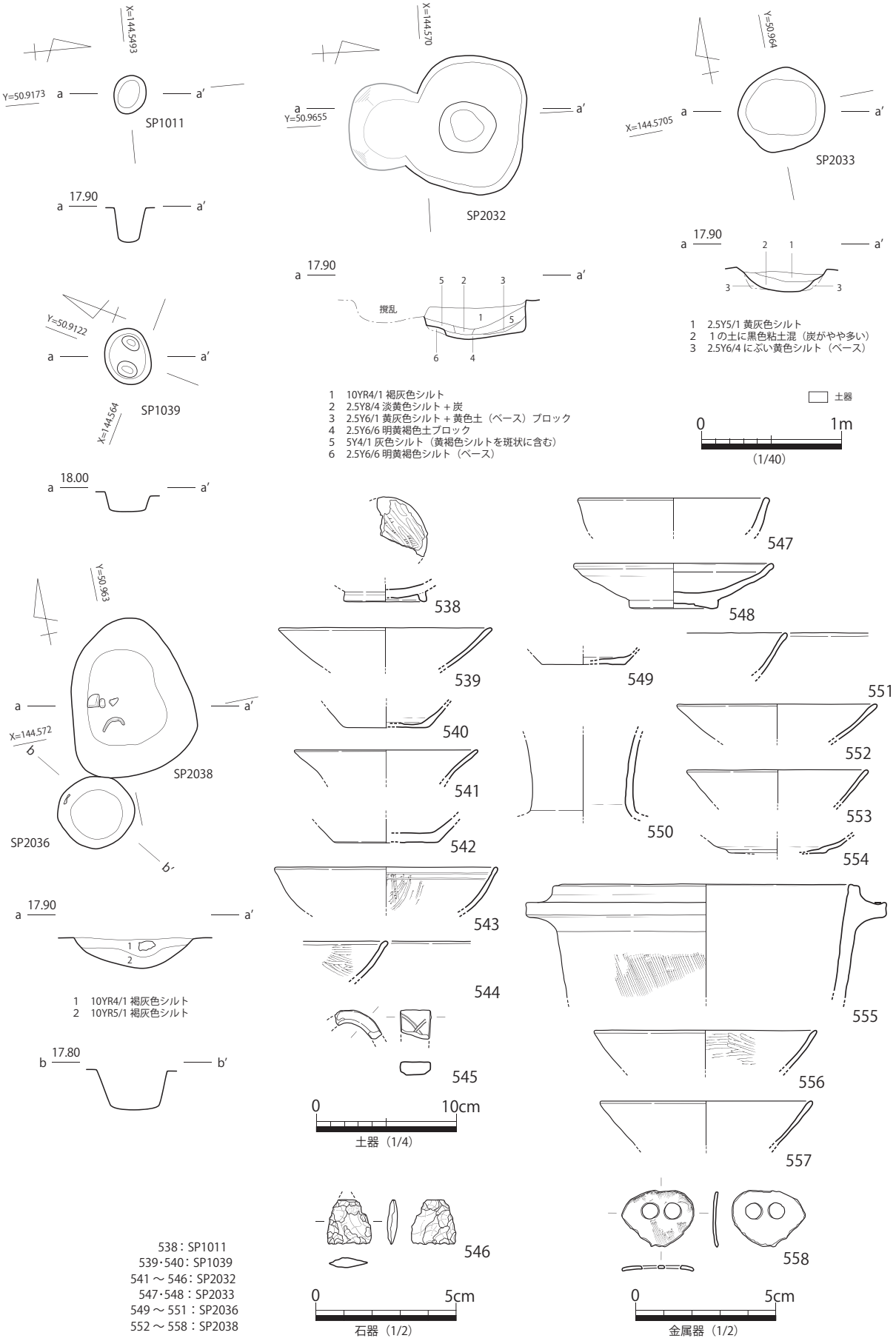
541・542 は須恵器杯。いずれも焼成不良で 541 は口縁端部に重ね焼き痕跡が残る。543・544 は黒色土器 A 類椀。545 は緑釉陶器、把手付瓶の把手部分と考えられる。京都洛北産。546 はサヌカイト製打製石鏃。平基式。先端部は欠損する。

緑釉陶器は 9 世紀前半であるが、他の出土遺物は概ね佐藤編年Ⅳ期中相～新相、9 世紀末葉～ 10 世紀中葉前半と考えられ、遺構の時期も同じ時期と考えられる。

**SP2033( 第 95 図 )**




第 94 図 SA404　平・断面図




第 95 図　古代ピット　平・断面図、出土遺物 (1)

Ⅱ区東端部で検出したピットである。SB201 の内部にあたる位置で、SP2032 の約 0.7m西側で検出した。円形で直径 60cm、深さ 14cmで埋土の下位に炭を多く含む層がある。

547 は須恵器杯。8 世紀代と考えられる。548 は緑釉陶器皿。底部は削り出し蛇の目高台。京都洛北産。9 世紀後半。

遺構の時期は緑釉陶器の時期である 9 世紀後半と考えられる。

**SP2036( 第 95 図 )**

Ⅱ区東端部で検出したピットである。SB201 の内部にあたる位置で、SP2033 の約 1.1m北西側で検出した。円形で直径 50cm、深さ 43cmである。

549 は土師質土器杯。550 は須恵器壺頸部。外面に自然釉が付着する。551 は黒色土器 A 類椀。

遺構の時期は出土遺物により佐藤編年Ⅳ期中相～新相、9 世紀末葉～ 10 世紀中葉前半と考えられる。

**SP2038( 第 95 図 )**

Ⅱ区東端部で検出したピットである。SB201 の内部にあたる位置で、SP2033 の約 1.1m北西側、SP2036 の北側に接して検出した。楕円形で長軸 112cm、短軸 83cm、深さ 20cm、埋土は褐灰色シルトである。

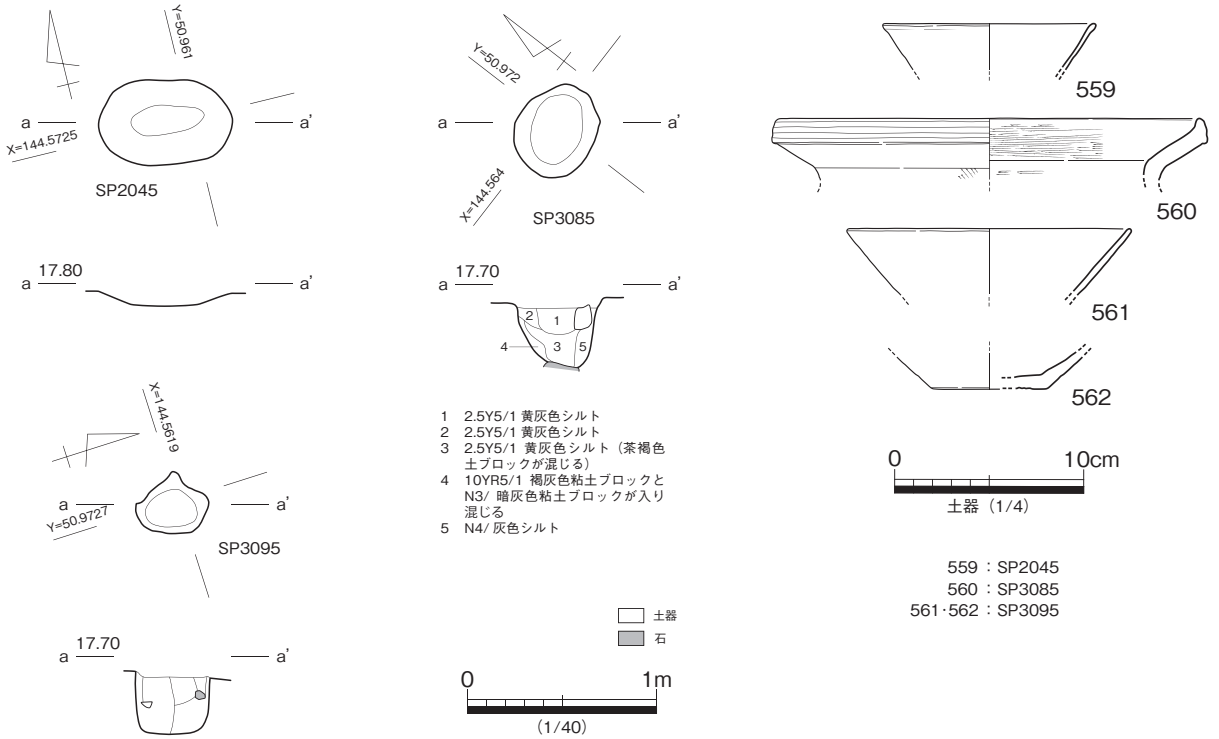
552 ～ 555 は土師質土器。552 ～ 554 は杯。須恵器と共通する器形である。555 は羽釜。556 は黒色土器 A 類椀。557 は須恵器杯。口縁端部に重ね焼き痕跡が残る。558 は不明銅製品。2 ヶ所に孔があり、周囲は折損する。凸面には細かい擦痕がある。

遺構の時期は佐藤編年Ⅳ期新相、10 世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

**SP2045( 第 96 図 )**

Ⅱ区東部で検出したピットである。SB201 の内部にあたる位置で、SP2038 の約 1.5m西側で検出した。楕円形で長軸 70cm、短軸 46cm、深さ 13.4cmである。

559 は土師質土器杯。須恵器と共通する器形である。




第 96 図　古代ピット　平・断面図、出土遺物 (2)

遺構の時期は出土遺物により佐藤編年Ⅳ期新相、10 世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

**SP3085( 第 96 図 )**

Ⅲ区南西部で検出したピットである。SB203 と SB204 の中間付近で検出した。楕円形で長軸 49.8cm、短軸 42cm、深さ 20cmである。埋土中からは土師質土器片が出土した。

560 は土師質土器甕口縁部。

遺構の時期は出土遺物により 9 世紀末～ 10 世紀中葉前半と考えられる。

**SP3095( 第 96 図 )**

Ⅲ区西南部で検出したピットである。楕円形で長軸 39.6cm、短軸 27.6cm、深さ 29cmである。埋土中からは土師質土器、須恵器などが出土した。

561 は土師器質土器杯。須恵器と共通する器形である。562 は須恵器杯。内外面に火だすきが残る。

遺構の時期は、出土遺物により佐藤編年Ⅳ期新相、10 世紀前半後葉～中葉前半と考えられる。

④土坑

**SK301( 第 97 図 )**

Ⅲ区南西部で検出した土坑である。隅丸長方形で、南東隅・北東隅は後世のピットにより消失する。SK301 の規模は長辺 82cm、短辺 62cm、深さ 6cm、北東隅の窪みは円形で直径 30.8cm、深さ 6 cmである。埋土中からは黒色土器 A 類碗が出土した。

563 は SK301 がら出土した黒色土器 A 類椀。564 は SP3015 から出土した土師質土器椀。

SK301・SP3015 とも、出土遺物により佐藤編年Ⅳ期新相、10 世紀前半後葉～中葉前半に相当する。

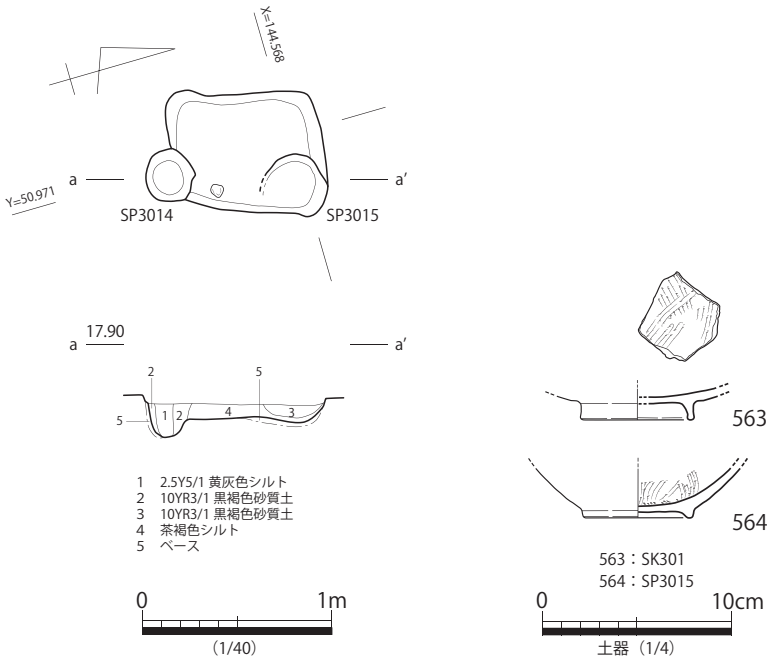
⑤溝

**SD201 ～ 203・206・311 ～ 313( 第 98 図・第 99 図 )**

Ⅱ区東部で検出した溝である。SD203 は SB201･202 の北側を、SD206 は西側を区画するように検出し、SD201･202･311 ～ 313 は SD203 から北へ向けて延びる溝である。SD201･202･311 ～ 313 はそれぞれ 2.8 ～ 3.4m間隔で並び、SD203 から北へ 6 ～ 7m程度検出した。いずれも SD203 とは前後関係はなく、同時併存と考えられる。いずれも幅 40 ～ 52cm程度、深さ 6 ～ 12cm程度で、埋土は褐灰色シルトである。

565 は SD202 から出土した遺物である。土師質土器長胴甕。566・567 は SD203 から出土した遺物である。566 は弥生土器甕底部。弥生時代前期Ⅰｃ期。周辺からの混入と考えられる。567 は土師質土器羽釜口縁部。568･569 は SD311 から出土した遺物である。須恵器蓋の摘み部分。8 世紀後半。

568・569 は時期が遡るが、遺構の配置や前後関係からの時期は SB201･202 と同じ 10 世紀前



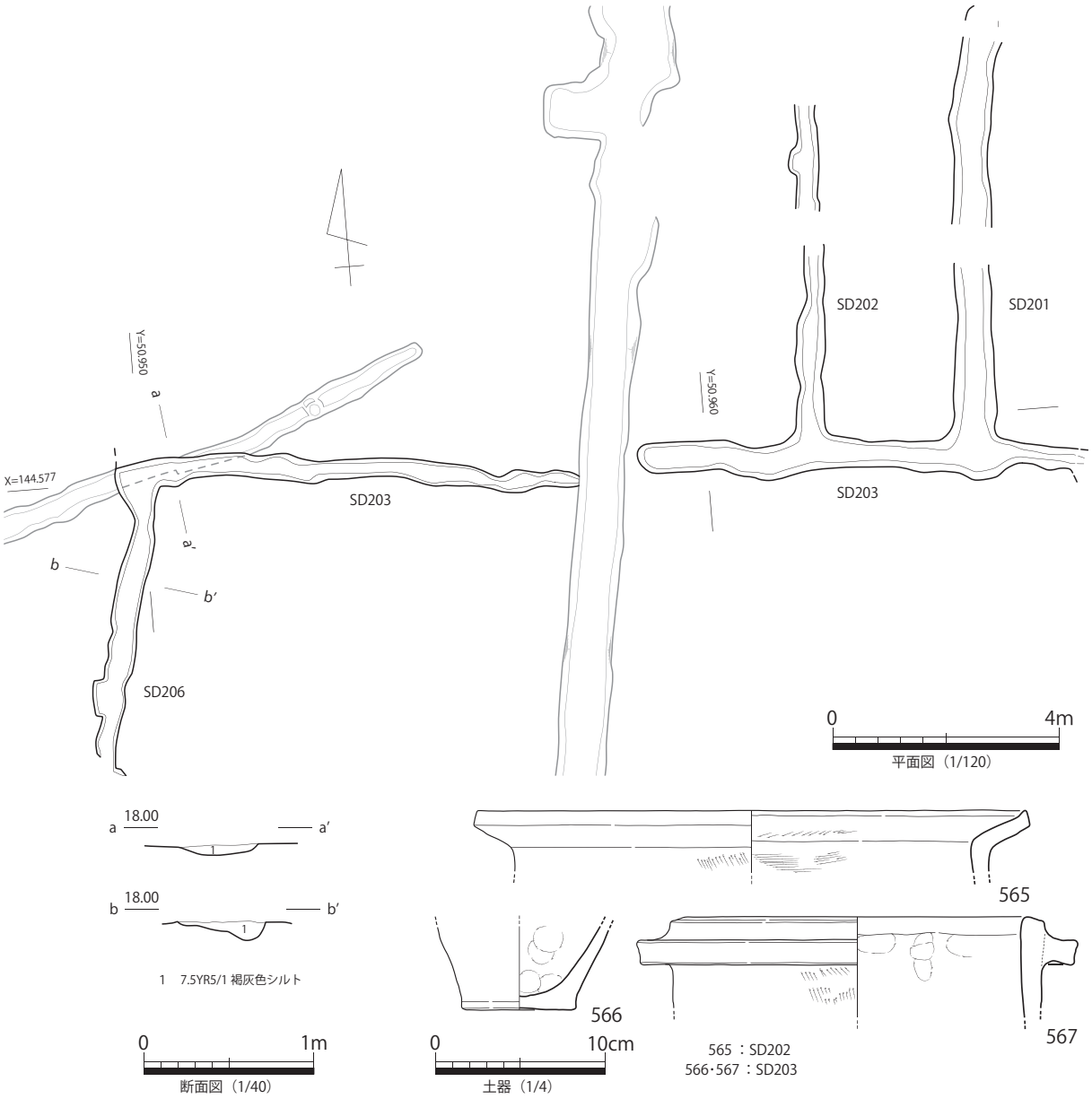

第 97 図　SK301　平・断面図、出土遺物

半後葉～中葉前半と考えられる。

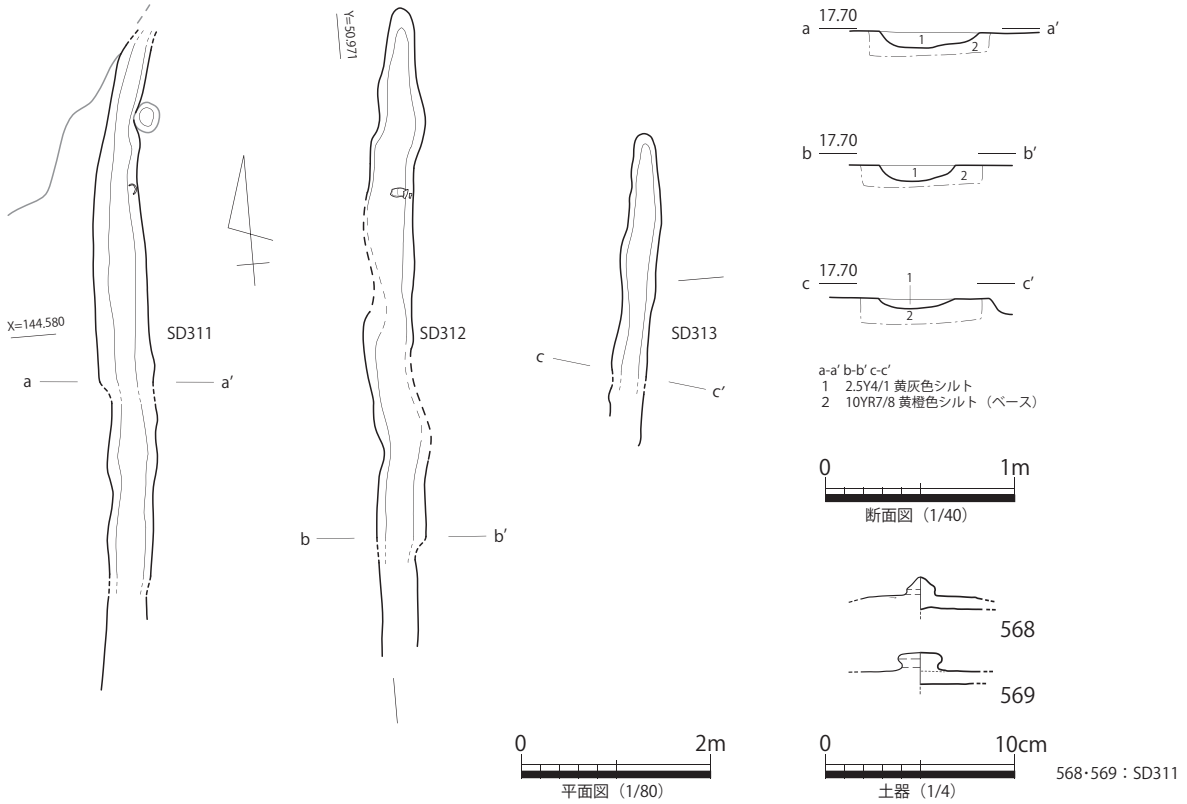
**SD314 ～ SD322( 第 100 図 )**

Ⅲ区西南部から東北部にかけて検出した溝である。Ⅲ区南西部を西から東方向へ約 8.5mの位置で北東方向へ屈曲し、約 15m で北方向へ屈曲する。また、北方向への屈曲部付近で西方向からの溝と合流する。幅は概ね 30 ～ 35cm程度、深さ 5 cm程度で、埋土は褐灰色シルトである。遺構番号は異なるが、概ね同一遺構と考えられる。遺構の前後関係により、SD302 より新しく、SB202・SB203 より古い。また、第 1 遺構面のベースである包含層を切り込む。埋土中からは 10 世紀前半を中心とする掘立柱建物群とほぼ同時期の遺物が出土した。掘立柱建物群築造以前の何らかの区画施設の可能性もある。

570 は SD314 から出土した。土師質土器杯。571 ～ 573 は SD315 から出土した。571 は土師質土器杯。572 は須恵器杯。573 は土師質土器甕。574 ～ 576 は SD316 から出土した。いずれも土師質土器で 575 は杯、576 は羽釜。577 は SD317 から出土した。土師質土器羽釜。578 は SD320 から出土した。黒




第 98 図 SD201・SD202・SD203・SD206 平・断面図、出土遺物




第 99 図　SD311・SD312・SD313　平・断面図、出土遺物

色土器 A 類椀。579 ～ 584 は SD321 から出土した。579 は黒色土器 A 類椀。580 は土師質土器杯。581 は須恵器杯。582･583 は土師質土器杯。土師質土器杯はいずれも須恵器杯と共通する器形を持つ。584 は土玉。2cm前後の円形で、表面には指押え痕跡を残す。5mmの孔を通す。

遺構の時期は、出土遺物からは佐藤編年Ⅳ期新相、10 世紀前半後葉～中葉前半と考えられるが、掘立柱建物群のピットにより切られることから、掘立柱建物群より少し前の時期と考えられる。

４．中世の遺構・遺物

①土坑

**SK105( 第 101 図 )**

Ⅰ区南部で検出した土坑である。楕円形で長軸 1.00m、短軸 0.70m、深さ 37cmである。埋土は褐灰色砂混粘質土で最下層に灰色粘土である。

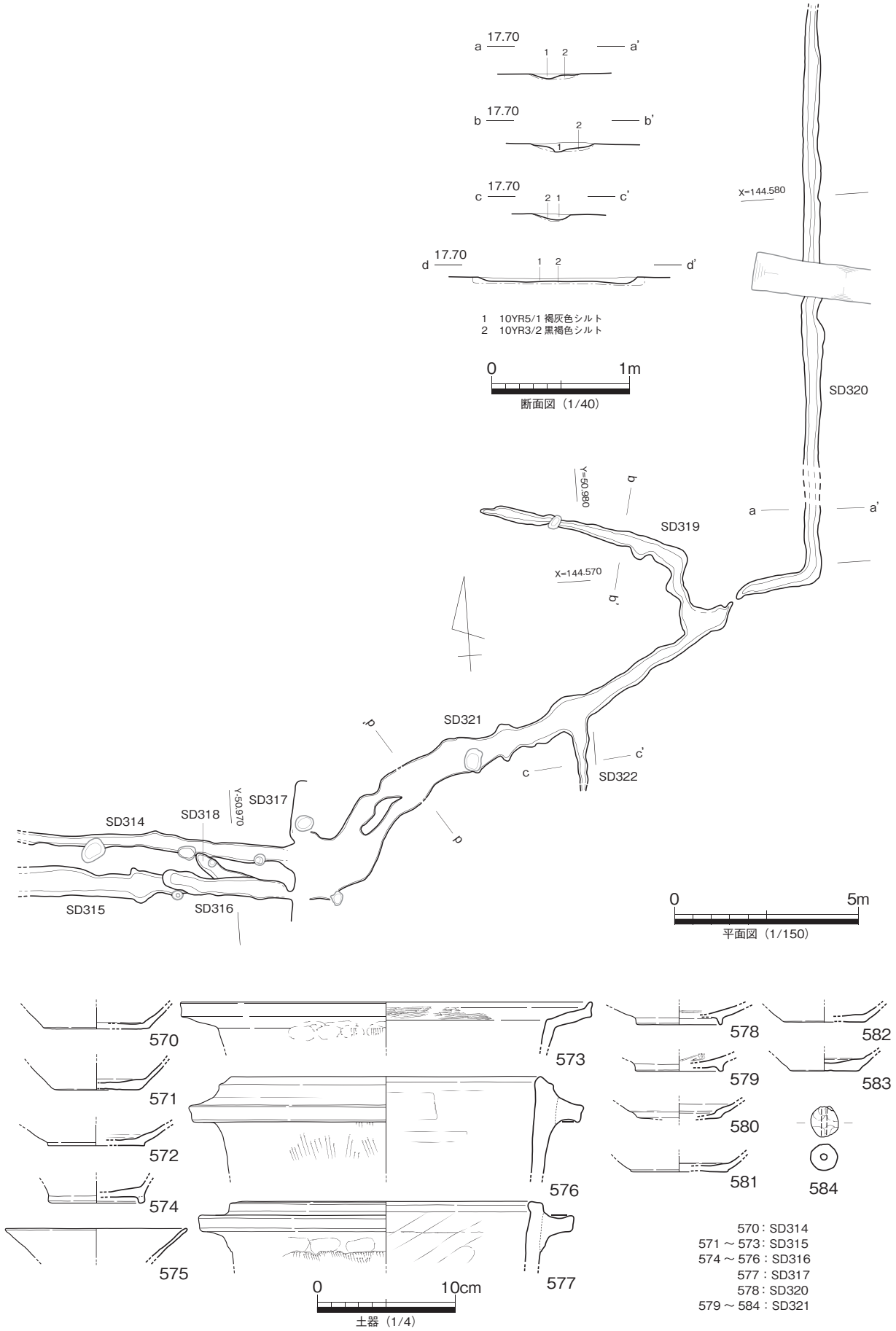
585 は土師質土器皿。586 はサヌカイト製打製石鏃。凹基式と考えられる。未製品である。

遺構の時期は出土遺物により佐藤編年中世Ⅱ -1 期、12 世紀第 3 四半期と考えられる。

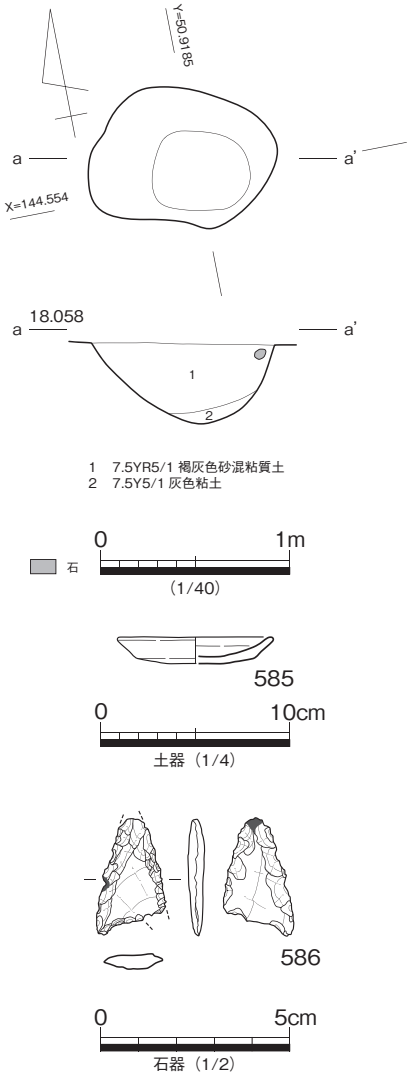
**SK302( 第 102 図 )**

Ⅲ区中央南寄りで検出した土坑である。楕円形で長軸 1.78m、短軸 1.16m、深さ 26cmである。埋土中からは龍泉窯青磁椀小片が出土した。

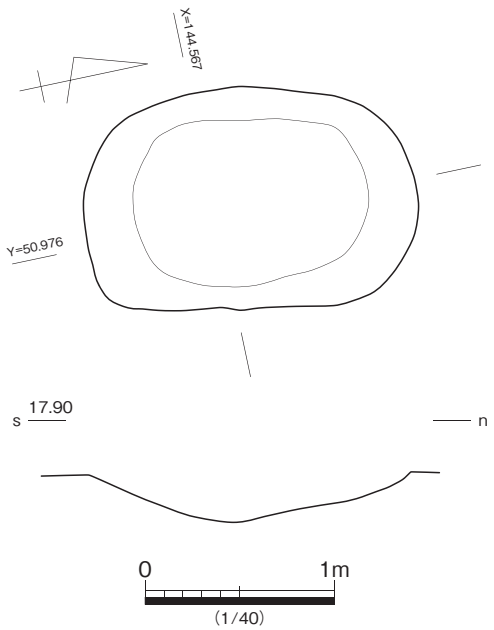
龍泉窯青磁椀の時期により、遺構の時期は、16 世紀前半頃と考えられる。



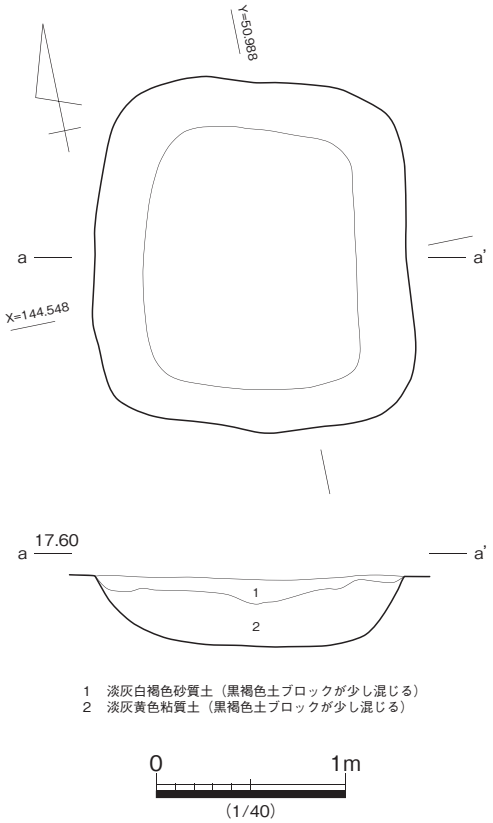

第 100 図 SD314 ～ SD322　平・断面図、出土遺物




第 101 図　SK105　平・断面図、出土遺物




第 102 図　SK302　平・断面図




第 103 図　SK401　平・断面図

５．近世の遺構

①土坑

**SK401( 第 103 図 )**

Ⅳ区中央で検出した土坑である。後述する SZ402・SZ403 より新しい。隅丸方形を呈し、長軸 1.8m、短軸 1.6m、深さは 40cmである。埋土はベースブロック土を含んだ灰色系粘質土ないし砂質土で、掘削後まもなく人為的に埋め戻されたと考えられる。

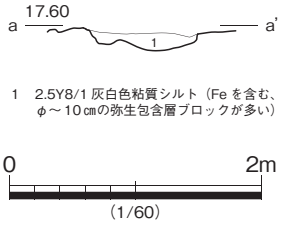
埋土中から土師器、須恵器、サヌカイト片、肥前系近世陶磁器片が出土した。

遺構の時期は出土遺物により 18 世紀代と考えられる。

②溝

**SD401( 第 11・102 図 )**

Ⅳ区東寄りで第 1 遺構面から検出した南北方向の溝である。検出長約 5.8m、幅 1.00m、断面形状は凹凸が著しいが、深さは最大で 6㎝程度である。埋土は灰白色粘性シルトである。形状などは SZ401 ～ 404 と類似しており、同じ性格の遺構と考えられる。



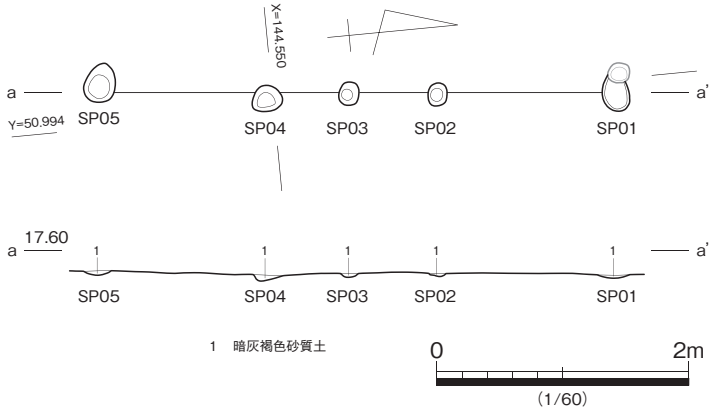

第 104 図　SD401　断面図

③耕作痕

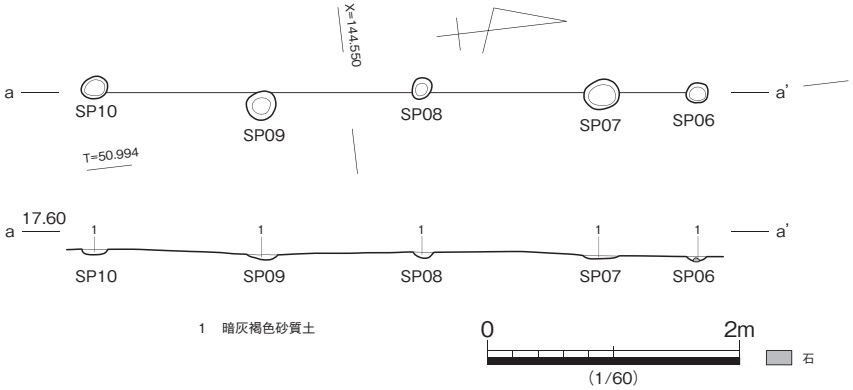
**SZ401 ～ SZ404（第 11 図）**

調査区東半部で第 1 遺構面から検出した。浅い掘り込みを伴った遺構で、耕作痕と考えられる。北・南・東方向は調査区外へ延びる。遺構の重複関係により SK401 より古い。検出された掘り込みはおおむね長方形に区画される。主軸方向はＮ 12.4゜Ｅで、概ね周辺の条里型地割の方向と同じである。掘り込みの底は鋤痕もしくは踏み込みとみられる無数の不定形な窪みがあった。埋土中からは土師質土器小皿、須恵器の細片、鉄釘や焼土塊などが出土した。遺構の前後関係から 18 世紀代の遺構である SK401 よりも古い。埋土である灰白色ないし灰オリーブ色粘質シルトは近世～近代の耕作土層に近似しており、遺構の時期は 18 世紀代よりそれほど遡らない可能性が高い。

本遺構で栽培された作物を特定するため、埋土の花粉分析を行った（第 4 章第 2 節参照）。その結果、イノモトソウ族のシダ類胞子 1 個体と他のシダ類胞子が少量検出されたのみで、検出される花粉化石

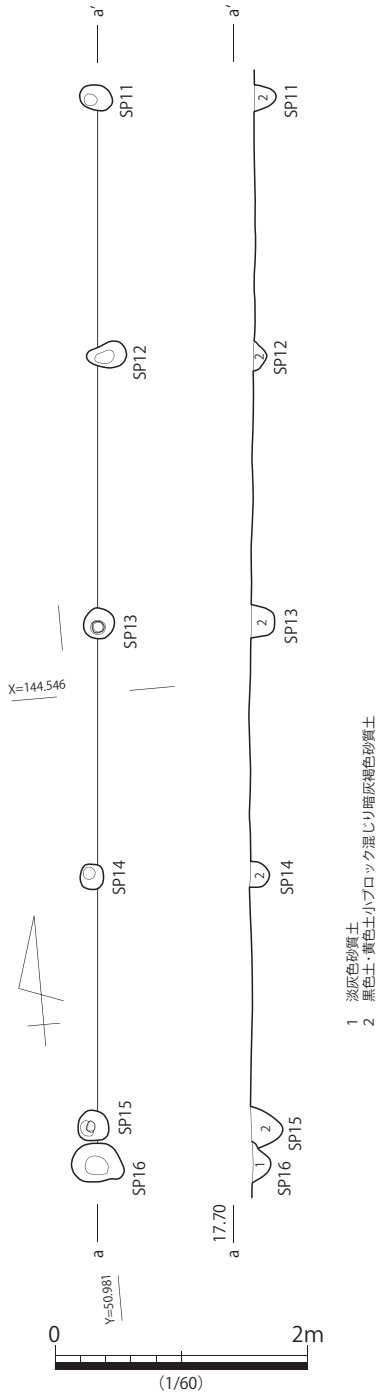



第 105 図　SA401　平・断面図




第 106 図　SA402　平・断面図

は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。




第 107 図　SA403　平・断面図

６．時期不詳の遺構

①柵列

**SA401( 第 105 図 )**

Ⅳ区東部、第１遺構面で検出した柵列である。北方向は調査区外へ延びる可能性がある。4 間（4.1m）検出した。柱間は 0.65 ～ 1.40mで主軸方位はＮ 5.5゜Ｅである。柱穴は概ね円形で直径約 20㎝、深さ 4 ～ 5㎝、埋土は暗灰褐色砂質土である。SA402 と近接して検出し、柱穴の規模、形状や埋土は SA402 と類似するが、柱穴の重複関係により SA401 が古い。

柱穴埋土中からは土器小片が出土したのみで、遺構の時期は不明である。

**SA402( 第 106 図 )**

Ⅳ区東部、第１遺構面で検出した柵列である。北方向は調査区外へ延びる可能性がある。4 間（5.0m）検出した。柱間は 0.75 ～ 1.45mで、主軸方位は N6.9゜Ｅである。柱穴は概ね円形で直径約 20㎝、深さ 4 ～ 5㎝である。SA401 の西側に近接して検出し、柱穴の規模、形状や埋土は SA401 と類似するが、柱穴の重複関係により SA401 より新しい。SA401 撤去後まもなく設置されたと考えられる。

柱穴埋土中からは出土遺物はなかった。遺構の時期は不明である。

**SA403( 第 107 図 )**

調査区中央西寄り、第１遺構面で検出した柵列である。4 間 (8.4 m ) 検出した。柱間は 2.0 ～ 2.1mで、主軸方位は N5.3゜Ｅである。柱穴は円形で直径 20㎝程度、深さは 26 ～ 44㎝である。出土遺物は土師質土器、須恵器の細片が出土したのみであった。遺構の時期は不明である。

②土坑

**SK312( 第 108 図 )**

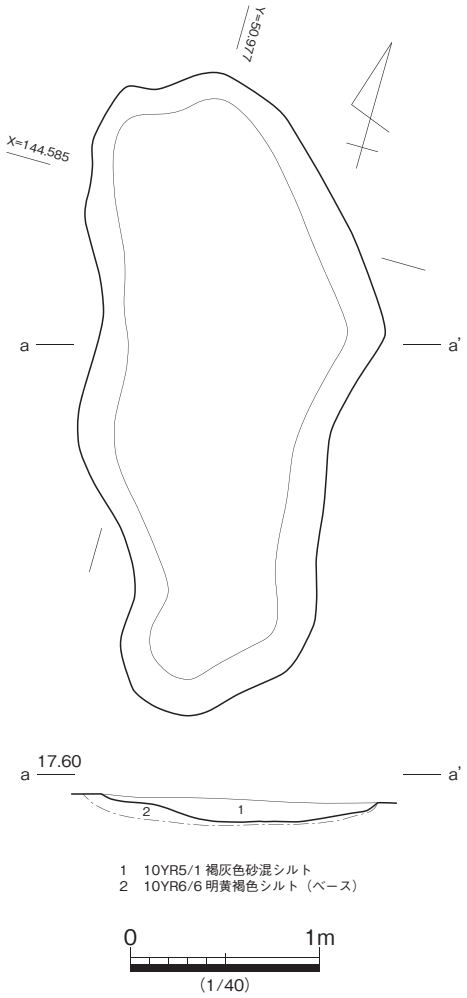
Ⅲ区北部で検出した土坑である。楕円形で長軸 3.35m、短軸 1.5 m、深さ 12㎝、埋土は褐灰色砂混シルトである。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は不明である。

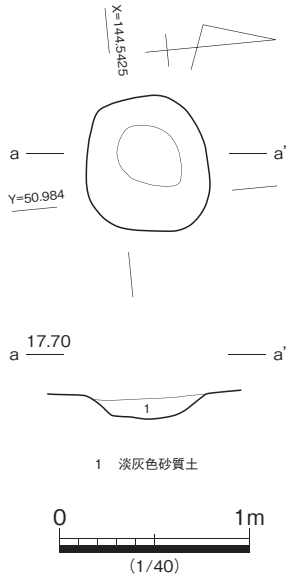
**SK402( 第 109 図 )**

Ⅳ区第１遺構面で検出した土坑である。おおむね１辺 0.6mの隅丸方形で、深さは 11㎝である。埋土は淡灰色砂質土で SK403 と共通する。埋土中からは時期不明の土器が出土しただけであった。

遺構の時期は不明である。




第 108 図　SK312　平・断面図




第 109 図　SK402　平・断面図

**SK403( 第 110 図 )**

Ⅳ区第 1 遺構面で検出した土坑である。隅丸方形に近いが、北側がやや欠ける形状である。長辺 1.6m、深さ 7cmである。埋土は淡灰色砂質土で SK402 と共通する。埋土中からは時期不明の土器が出土しただけであった。

遺構の時期は不明である。

③溝

**SD104( 第 111 図 )**

Ⅰ区南端で検出した溝である。東・西側は攪乱により消失し、南側の肩は調査区外へ延びる。幅 52cm以上、深さ 18cmである。埋土中からは出土遺物はなかった。

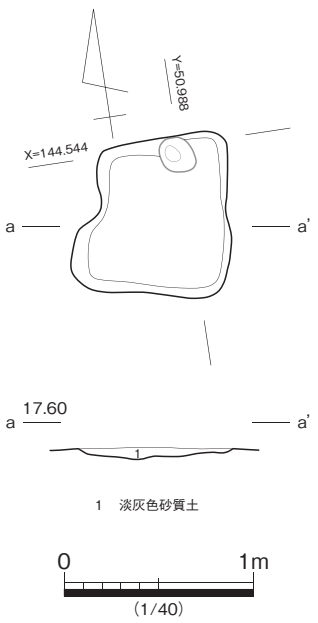
遺構の時期は不明である。

7．遺構外出土遺物 **( 第 112 図 )**

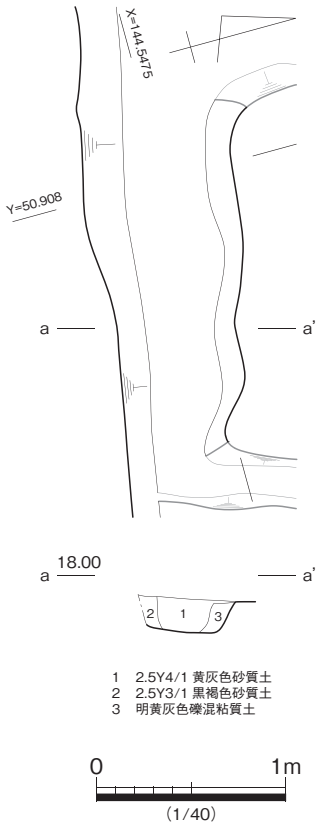
587 ～ 618 はⅡ・Ⅲ区の弥生時代包含層または遺構面精査中に出土した遺物である。

587 ～ 592 は弥生土器。587・593 が遺構面精査中に出土した他は弥生時代包含層から出土した。587 ～ 591 は前期Ⅰｃ～Ⅱａ期。587 ～ 590 は壺。587 は頸部と体部にヘラ描き沈線を巡らせる。体部の沈線は段を持つ形状になる。588 は壺体部。有軸木の葉文を描く。589 は大型壺体部片。589 はヘラ描き沈線を 3 条巡らせる。沈線の上部は段状になる。590 は大型壺底部。底部と体部の境付近の屈曲は強く、粘土を張り合わせて厚くした痕跡がある。591 は甕。頸部にヘラ描き沈線を 2 条、沈線の間に刻み目を施す。592 は鉢。593 ～ 595 は弥生土器を転用した紡錘車と考えられるが、594 は中央に貫通しない 2 孔が並び、未製品と考えられる。596 は管状土錘。

597 ～ 603 は平安時代の土器で、遺構面精査で出土した遺物である。597・598 は土師質土器杯。須



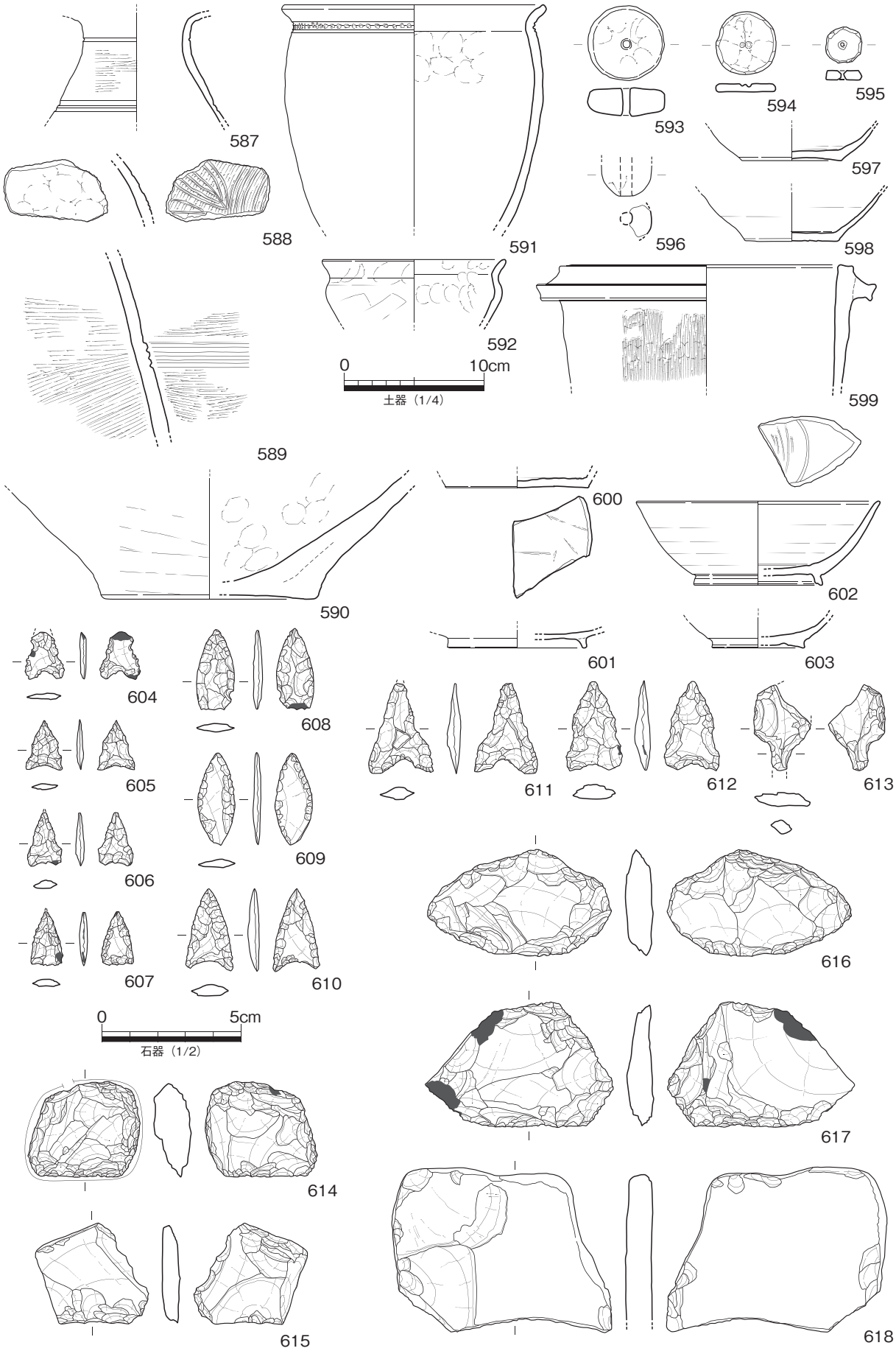

第 110 図　SK403　平・断面図




第 111 図　SD104　平・断面図

恵器と共通する器形である。599 は土師質土器羽釜。600 は須恵器杯。底部にはヘラ描きがある。601 は黒色土器 A 類椀。602･603 は緑釉陶器椀。ともに削出高台で 602 は輪高台、603 は蛇の目高台である。ともに京都洛北産。602 は見込みに沈線が観察できる。

604 ～ 618 は石器。いずれもⅡ・Ⅲ区で包含層及び遺構面精査中に出土した。604 ～ 617 はサヌカイト製。604 ～ 612 は打製石鏃。604 ～ 606、610 ～ 612 は凹基式、607 は平基式、608・609 は柳葉式。613 は石錐未製品。基部、上部とも折損。614 は石核。四周に敲打痕がある。615 ～ 617 はスクレイパー。618 は盤状に加工した安山岩片である。




第 112 図　遺構外　出土遺物